
アズライト

杉田 尋寅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アズライト

【Nコード】

N2731K

【作者名】

杉田 尋寅

【あらすじ】

何もかも平凡な高校生、内藤祐人。周りには、自由気ままな透過少女、騒がしいばかりのクラスメート、無口すぎるマスター、気ままな刑事、と変わった人ばかり。常識と非常識が混じり合い、日常と非日常が区別できなくなった状況で、いったい何を信じればいいのかだろうか。##初投稿作品です。遅筆のため、更新は不定期になります。乱文悪筆ですが、どうかラストまでお付き合い下さい。

プロローグ

それらは、個々に見れば成金趣味と思われても仕方がない代物だった。

大の大人が数人横に寝転んでも十分に余裕がある廊下には、厚みのある真っ赤なじゅうたんがいっぱい敷き詰められている。西側の大きな窓からは太陽の光がさんと降りそそぎ、東側には豪華な飾りのついた扉が等間隔に並んでおり、その間には高価な美術品と絵画が無造作に並べられている。

しかし、それらの調度品はその雰囲気とあいまって、その空間そのものが芸術であるかのような実感を思わせる。

そのじゅうたんを踏みしめ、雰囲気飲まれず堂々と闊歩する者が二人いた。

「どうして君たちはこう、毎度毎度問題ばかり起こすかねえ」

一人は、そう言って肩をすくめてみせる、20代と見える青年。金髪を短く刈り込み、長身で整った顔立ちだが、特徴のない顔ともいえる。

「『君たち』？ それにはあたしも含まれてるのか？ お前だってそんなに変わらないでしょうが」

もう一人は、青年の数歩前を振り返ることなく歩く、10代前半に見える少女。腰のあたりまで伸ばした突き抜ける青空のような長い髪が一番に目を引く。その長い髪を掻き上げると、左耳に二つのイヤリングがきらめいた。

青年と少女は、それぞれ正装でその上に膝まで隠れるマントを羽織っている。

「昔はボクも若かったからね。でも、今にもなって、しょっちゅう問題を起こして回るのは、君たち双子とアドラーぐらいだよ」

「でも！」

少女は立ち止まって青年の方を振り向いた。髪の色と同じ空色の眼

に、透き通った肌。顔のパーツパーツはまだあどけなさが残るが、それでいて見た者をはっとさせるような華がある。

「でも！ 他の連中は否定しないけど、あたしは違う！ だって、依頼は全部こなしてるし、定例会にも出席してる！ 今日だって、議会に召喚されて今ここにいるじゃない」

細い眉を目一杯寄せて、少女は青年の主張を否定にかかる。一方、青年の方はといえば、少女の頭をコツンと小突くだけで、立ち止まらずに歩を進める。軽くいなされた少女は、青年の後につづく。

「議会の老人連中が何を考えてるのかは解らないけど、ホラ、情報収集班をフルに利用して集めた今回の問題に関する資料だよ」

青年から少女に、綴られた十数枚の書類が渡される。書類の右上には、【持出禁止】の赤いスタンプが押されている。だが、少女は気に留めるふうもなく、ページをめくって流し読みしていく。

数枚めくったところで、急に手が止まった。

「『機密文書を持ち出して逃亡』……」

少女がつぶやいたその文言だけが、少女の求めていた情報だった。残りは、その事実と証拠、それが周囲に与える影響などが詳細に記されていた。

「機密文書、てどのレベル？」

少女は資料から目を離して、青年を見上げた。「機密文書」と名乗ってはいるが、そのレベルはピンからキリまであり、一つの国を滅ぼせるようなものや秘密会議の議事録から、悩んだ時の今晚のおかずの献立まである。また、重要なものは厳重に保管されており、議会の議員でも簡単に見ることは出来なくなっている。

「さあ？ 現状では何とも」

「そう……あたし達でもみ消しは？」

「出来たらもうやってるし、問題にさせないよ」

青年が強く言いきったのを、少女はあきれ顔で見遣った。

と、前方に行き止まりが見えてくる。興味の失せた書類を青年に返すと同時に、小走りで追い抜かす。近づくにつれ、行き止まりが

壁でないことが解る。廊下の途中にあった扉のような豪華な飾り付けはないが、所々に凝った部分が見受けられる。

扉の前につくと同時に、重苦しい、証人喚問の時間を告げる鐘の音が鳴り響いた。

「この鐘、そろそろ替え時でしょ。耳障りで仕方がないよ」

「あたしには脳みそカチカチ連中の耳障りなお小言が待ってるの」
青年が眉を寄せるのを脇目に、少女は緊張した面持ちで作り込まれた扉の取っ手に手をかける。慣れているとはいえ、最近ではご無沙汰だ。

少女は一度、深呼吸すると、ひと思いに扉を押し開けた。

そこは、すり鉢状の部屋だった。中央へ行くにつれて床はだんだんと低くなり、その周りを20、30の机が同心円上に並んでいる。机には少女言うところの「脳みそカチカチ連中」がそれぞれ少女達とは違う黒いマントを羽織って座っており、200人程いるようだが、常とは違うタイプの緊張が取り巻いている。

すり鉢の淵に扉があり、少女はそこで立ち止まる。と、すり鉢の一番下にいた初老の男性がそれに気付いた。

「では、この証言台へ」

言って、すり鉢の中央にある、小柄な机を指し示した。周囲が無言でざわめく。まるで、空腹の肉食獣を見つけたかのように。まるで、他人の生殺与奪権を自分が持っているかのように。

少女は軽く頷くと、音もなく飛んだ。

次の瞬間には、示された証言台の前にいた。今度は怒りとも畏れとも歓喜ともとれるざわめきが広がる。その中で、初老の男性は何に臆する風もなく立ち上がった。

ざわめきが収まるのを待ち、男性は重々しく口を開く。

「さて、今日はどうしてここに呼ばれたか、知っているね？」

「ええ、あたし達が知りうる限りは」

双方とも、口調は厳しいが、出てくる言葉はふざけた内容。少女の、今も昔も変わらない純粹で明確な態度に、男性は微笑む。しかし、

それも束の間、この場を任される者としての使命を果たすべく、重い口を開いた。

「最重要機密文書偽造及び漏洩及び逃亡の嫌疑がお前の姉妹、ニナ
ンナⅡスカンディアンⅡフューラーにかけられている。そこで、汝、
エルラガルⅡナヴィアンⅡフューラーに言い渡す！ 容疑者の搜索
をすぐに始め、逮捕もしくは手に余る場合は汝の手で処刑せよ！」

「最重要！？ 処刑！？」

部屋全体が震えた。それは、少女の思惑を遥かに超えていた。

『1 こうも毎日毎日同じことの繰り返しで、よく飽きないわね』

もし、第三者が彼について意見を求められたら、こう答えるだろう。

「普通」

だと。

特段背が高いわけでも低いわけでもなく、太っているわけでも痩せすぎなわけでもない。

特段格好良いわけでもなく、見苦しいほどでもない。

特段人前に出る方でもないし、休みになるとボランティアに勤しむようなこともなく、やんちゃなこともすることはない。

だからといって、完全に「平均」な人間などいるはずもない。

そして、彼――内藤祐人――は、ある一点においてずば抜けて「普通」ではない。その一点とは、得体の知れないモノに憑かれていくという点だ。

その憑き物は、今、祐人が歩く2、3歩前を何事も無いように歩いている。背中の方から見ているが、一番最初に目に飛び込んでくる視覚情報は「青」一色だ。祐人の胸の高さぐらいの青い何かが、滑るように進んでいく。

憑き物に憑かれてから1ヶ月ちよつとになるが、人間の環境適応能力というのは素晴らしいもので、それが何をしようが気にならなくなつたし、扱いにも慣れてきたように思っている。それはやはり、見えるだけで触れはしない上に、周囲に影響を与えることがないからだろう。

と、憑き物が赤信号の横断歩道の手前で止まる。追いついて隣に立つと、青い眼で見上げてきた。

かわいらしい少女だ。一言、色で表すならば、突き抜けるような青空の空色。腰のあたりまで伸びた、ストレートの青い髪と、大きな青い眼が一番に主張する。薄く紅いくちびるはキツと結ばれ、少

々キツいようにもとれる細い眉と共に、意志の強さを感じさせる。陶磁器のような淡い色彩の肌は、憑き物だという理由だけではないに違いない。青と白を基調とした服装は、12、3歳に見えるその容貌と比較すると、少し背伸びしているように見えるのもその少女に愛おしさを感じさせるのに充分だ。

「そういえば、ここは」

少女が口を開く。心なしか、口元が緩んでいる。

「お前がでっかい車に跳ねられそうになって、地面に這いつくばってガタガタ震えてたところじゃない。今日はそんなことなさそうね」しかし、この少女は口が悪い。しかし、この発言はもちろんのこと、周囲の人間には聞こえない。あまり過敏に反応すると怪しがられるので、適度に無視、もしくは受け流す。これもこの1ヶ月に学習したこと。

「はいはい、そーですね」

と、祐人は棒読みで応じる。

だからといって、無視し続けると、延々と周囲には聞こえない大声で騒ぎ続けた後、不機嫌になって不機嫌オーラを出し続ける。干渉できない相手でも、近くで不機嫌オーラ（かなり強力）を出し続けられたら気が滅入ってしまう。

逆に彼女からしてみれば、外部の情報は得られても、何か外部に向けてのアクションを起こすことは出来ないわけで、無自覚に溜まるストレスを発散するはけ口は祐人との会話に求めるしかない。そう考えると、無視し続けるのは、いくら憑き物だからといって、ちよっと可愛そうかな、とも祐人は思っている。

信号機が表示が変わり、流れが変わる。

「しかし、こうも毎日毎日同じことの繰り返しで、よく飽きないわね」

少女は、周囲を見回し、ため息まじりにつぶやいた。少女の示すところは、祐人が高校に登校中だというだけでなく、朝になると出勤・通学し、夜になると家路につくというこの状況そのものようだ。

「他人に憑いてるだけじゃ、その重要性がわからないんだよ」

ただ、祐人には自分の生きている世界が全て侮辱されたような気がして、ちよっとムキになって言い返した。その声に反応して、少女が振り向く。驚いたような表情と、喜んだような表情とが共存している。

そして、あからさまに嘲笑するような表情に変わる。

「いったい、どうしたの？　もしかして、気にでも障ったのかしら。本当にそうだったら、お前の器は……たか、が………」
知れてる、とは続かなかった。

立ち止まり、無表情で空の向こうを見つめている。その真剣さにつられて、周囲に気を配りながら、祐人も立ち止まる。

「おっとと、どうした？」

しかし、何の返事もない。

放っておいても、誰の邪魔にもならないし、気付いたら後を追いかけて来るだろう。そう思って、祐人が歩き始めた瞬間だった。

「！！？」

まるで、意図せずに冷たいぬかるみにはまったような感覚。その冷たさ、気持ち悪さは、始めに皮膚の表面を覆い、だんだんと身体の内部を冷やしていく。それとほぼ同時で、何かに引き寄せられるかのように、少女と同じ方向を向いていた。

（そうか、この感覚……これを察知していたのか………）

「やっと、気付いたわね」

いつの間にか、少女は祐人を見ていた。その目は、青がぎらぎらと鈍く光っている。

その目に見覚えのある祐人は、ぞっとした。つまり、生物の本能としての恐怖ではなく、これから巻き込まれる面倒な事件への忌避感という方向で。

「付いてきなさい！」

そう言って、少女は路地裏に飛び込んだ。

祐人は、ちよっとためらう。付いていったら、絶対やっかい事に

巻き込まれる。そして、肉体的・精神的負担を背負い込んで、かなり疲れる。だが逆に、放置して学校に行ったところで、やっかい事は膨れ上がって結局巻き込まれることになる。

「仕方ない……」

遅刻も覚悟で、祐人は見えなくなりつつある少女の後を追いかけて細い路地裏に入った。

『2 数々の暴言と狼藉、忘れたとは言わせないわよ』

「迷った……」

祐人はつぶやいた。路地裏へと消えた憑き物の少女の後を追いかけてきたが、追いかけても追いかけても追いつけず、結局見失ってしまったのだった。

どうしたもんかな、と学生服の第一ボタンを外す。

今いるのは、ちょっと幅が広く、軽自動車なら通れそうな道だが、追いかけている途中には、自転車でも通れそうにない道が幾つもあった。いつものように通る場所では勿論ないので、路地裏に入った場所には戻れそうもないが、なんとなく今の位置は掴めている程度だ。その状態で、見失ったものを探し出すのは結構骨が折れる。

「まずは、大きな通りに出た方がいいだろうな」

自分に言い聞かせて、歩き出す。

ビルの角を曲がった時だった。

「おっとと」

「痛え！」

向こうから歩いてきた通行人と、軽く衝突した。祐人は通行人に辛うじて気付き、肩がぶつかるだけの最小限の被害で抑えることが出来た。

（マンガとかだと、だいたい遅刻しかけた女の子なんだが……）

「おいテメエ！ どこに目えつけて歩いてんだあ！」

そこに転がって怒号を張り上げていたのは、祐人より少し年上くらいの、元気があふれて困ってます風なスキンヘッドのオニイチャンだった。

「ジュンが骨え折ったらどうすんだ、オイ！？」

「どうオトシマエつけてくれんのかな？ エ？」

お友達思いのひよる長とニット帽のオニイチャン達が鋭い目つきで、首を赤べこのごとく振りながら、次々と台詞を吐いていく。

（現代のこの街に、こんな天然記念物みたいな人種がいるとは思わなかったなあ）

あまりにもありきたりな反応と言い回しと特徴で、祐人に悪寒が走った。それはそれは思考が停止するまでに。

「おいおい、どうした？ オレ達だって悪者じゃない。コイツの治療費さえ出してくれたら何にもしないから」

スキンヘッドが足を押さえて痛がっているのを脇目にして、ニット帽がニヤニヤしながら馴れ馴れしく肩を組んでくる。近寄られると、酒とタバコの匂いが鼻を突く。朝帰りだろうか。7時はとうに過ぎているが。

祐人はわざとらしくため息をつく、ポケットに手を入れた。それを見て、痛いはずのスキンヘッドも含めて3人の口の端が上がってゆく。

「ああ、あったあった。ほら」

祐人はポケットから何かを取り出し、地面に放った。

チャリンチャリン、と涼しい音を立てて百円玉が4枚、転がった。「それで包帯と絆創膏ぐらい買えるだろ。急ぎの用事があるので俺はこれで」

そう言って、祐人はニット帽の腕を払いのけると、平然と歩き出した。

呆然と祐人を見送る3人組。祐人の背中を見、地面に転がる400円を見る。そして、一人一枚ずつ百円玉を手にとった。ニット帽がつぶやく。

「この100円、3人で分けられないぞ」

「ああ……………っておい！」

ひよろ長がニット帽とスキンヘッドの肩をはたく。

「軽くダメされてンなよ、お前ら！！ 追いかけるぞ！」

「お、おう……………あ！ あんにゃろ、ダメしたんだな！」

ひよろ長が先頭を、ニット帽がその後を、スキンヘッドは未だ首を傾げつつ、祐人の歩いて行った方へ走る。勿論、祐人はすでにそこ

にはいない。3人組が目を逸らしたスキに走り出し、脇道に逸れている。

「どこ逃げやがったんだ？」

「こっちだ！」

スキンヘッドが、逃げる祐人の後ろ姿を発見した。野太い声に反応して、祐人は後ろを振り向く。そこには、2足歩行を平然とやってのけるスキンヘッドと、その後を追うひよろ長とニット帽がいた。

「足が骨折してるのに、あんなに走れるはずないだろが」

「誰も骨折したなんて言ってるねーよ、バカ野郎！！」

嬉々としてスキンヘッドが叫ぶ。だったら、何故追いかけるのだろうか。疑問をぶつけてみたかったが、祐人は止めた。代わりに、積み重なっているビール箱を引っ掛けて崩し、後ろへの妨害にする。罵声が一段と大きく響いた。

祐人は十字路で立ち止まり、荒い息を整えながら三方を見渡す。

「さて、ちょっと時間稼ぎにはなっただろ。しかし、ますます迷った」

3人組から逃げる途中で、もう何度どちらに曲がったかすら覚えていない。こうなったからには、もう自分の勘に賭けるしかない。後ろから聞こえる怒号に押されて、右に全力で走る。

だがそこは、

「ここまで、か……」

行き止まりだった。幾つかのビルが連なっているが、その間是有刺鉄線のついた金網がついており、通り抜けることは出来なくなっている。唯一の救いといえば、なかなか広いことだろうか。上手くいけば3人組の間をくぐり抜けて逃げることもできるかもしれない。

「残念だったなあ。もう逃げられないぜ」

野太い声に気付いて後ろを振り向くと、スキンヘッドが肩で息をして立っていた。後ろには、今にも倒れそうなニット帽もいる。

「元陸上部をナメんなよ！！」

祐人にはもう言い返す気力もない。しかし、疑問がどうしても湧き

上がってくる。

「一人、足りないぞ」

そう、ひよろ長の姿が見当たらない。スキンヘッドとニット帽はきよろきよろと周囲を見回す。だが、ひよろ長の姿は見えない。

「あれ？祐人じゃない」

どこにいても、良く通りそうな声。声に呼ばれて振り向くと、青い少女が怪訝な様子で首を傾げて立っていた。

「お前、どこから入ってきた」

「何度目かなあ？透けてるから壁ぐらい通り抜け可能なんだけど」
「……そうでした」

そして、少女は2人組を見る。人さし指で指し、祐人を見上げた。

「なに、あれ？」

いやいやいやどんなに常識が欠如してても周囲の環境と相手の雰囲気だけでいたい状況くらい掴めるだろ、などという祐人の甘い考えのはるか斜め上を突き抜けていく。

ひよろ長を探していたスキンヘッドとニット帽は、やっと少女が現れたことに気付いた。ニット帽が怒鳴る。

「小学生一人増えたところで何にも変わんねーよ」

マズい、と祐人は思った。貶されてこの少女が黙ってるはずがない。案の定、怒りのオーラが渦巻いている。

「それはどうかしら」

「ンだと！クソガキがあ！」

売り言葉に買い言葉。正直言って、もうここにいる誰の相手をするのも面倒くさい。

その時、二人組の後ろに、ひよろ長が現れた。

先刻までの奴じゃない。祐人はとっさにそう思った。遠くから見ても、虚ろな目といいおぼつかない様子といい、感じる違和感を拭い去れない。

「よう、遅かったじゃねえか」

「ガキども、2対3で勝てそうか？」

スキンヘッドとニット帽がひよろ長の肩を叩いて出迎える。

少女の顔色が変わった。

「お前ら！ そいつから離れなさい！」

二人の顔には笑みが張り付いている。ひよろ長の様子・表情とは対照的だ。それは、意図するところが解らない祐人にすら嫌悪感を感じさせる。

いきなりだった。

「――――」

ひよろ長がヒトでは真似の出来ないような、叫び声を上げた。弾かれたようにスキンヘッドとニット帽は数歩後ずさる。

ひよろ長は、そのまま地面に膝をつくと、うめき続ける。

2度ほど激しくビクンと跳ねると、様子が変化し始めた。彼の周りに風のような、だが触れられそうなものが渦巻き始めた。渦巻く何かは彼の身体全部を覆い、元の一回り、二周りほど大きくなると沈滞してくる。よく見ると腕なら腕だけ、足なら足だけ、胴体なら胴体だけというように、バラバラに固まっていくのが解る。

うめき声が止んだことも気付かず、4人はひよろ長だった何かがゆっくりと立ち上がるのを凝視している。筋骨隆々の丸太のような肉体、手足の長くて鋭い爪、奇妙に歪んだ顔。それはまるで、

「鬼……」

童話などに出てくる鬼そのものだった。ただ、甲冑や鎧のようにぎくしゃくとした様子が見受けられる。

ひよろ長、もとい鬼は音もなく、周りのスキンヘッドとニット帽に腕をふるった。2人は簡単に空を飛び、祐人の脇を抜けて後方ビルの壁に激突した。一拍遅れて、祐人は振り向く。吹き飛ばされた二人はそこで気を失って倒れている。

鬼の方を振り向くと、べたっ、べたっ、と一步一步確かめるように祐人の方へ歩いてきていた。

「これ、どうする？ っておい、ちょっと待て！」

少女が歩を進め、鬼の前に立ちほだかった。鬼の足が止まる。

「いけるか？」

小さく、呟く。少女は大きく身を沈めると、手の甲で鬼の脇腹をなぎ払った。先程吹き飛ばされた2人と同じように、いや、それよりも速く、重い音を立ててビルの壁に激突する。

「触れる！！」

少女の歓喜の叫び。それは同時に、鬼にとっての地獄の叫びとなる。

「あたしは、《紡水師》エルラガルⅡナヴィアンⅡフューラーだ！

数々の暴言と狼藉、忘れたとは言わせないわよ！！」

青の少女は髪を振り払って誰ともなく指差し、高らかに宣言した。

あたしが遊んでたんだと思っただけでしょ

鬼が、むつくりと起きあがる。ビルの壁面にはひび割れがクレ―ター状に広がっていたが、本人にはそれほど障害はないようだ。

青の少女、エルラガルは、ふん、と鼻を鳴らした。

「今のはぐい挨拶みたいなものよ。堅さはそこそこかしら、ね！」

言うが速いか、エルラガルは一足飛びで鬼の目の前に到達する。大きく振りかぶると、鬼のみぞおち目掛けて拳を放つ。

「なっ！」

だが、エルラガルの拳は鬼の身体をすり抜ける。そのままバランスを崩して前につまずくと、奇妙な雄叫びを上げながらビルの壁面に消えていった。

祐人はそれを呆然と見ていた。エルラガルが消えていった場所から目を逸らすと、ため息をついた。

「結果、相手を怒らせただけじゃないか」

ふと、気配を感じて振り向くと、ニット帽とスキンヘッドが目覚ましたところだった。二人は何事もなく立ち上がる。

祐人は二人に声をかける。

「ケガはないか？ お前らじゃ相手に……な、らな……い……」

感じたことのある、違和感が襲った。それは、ひよろ長が現れた時と同じもの。

結果はすぐに現れ、祐人の予想に違わないものだった。

「ッ！！」

ニット帽とスキンヘッドはほぼ同時に、ひよろ長と同様にうめき始める。

何から何までが同様だった。渦が巻き、大きくなると固体化して、鎧のような肉体が身体を覆う。気付いてみれば、前には元・ニット帽と元・スキンヘッド、後ろには元・ひよろ長、と挟まれている。

「これはもう……」

倒すしかない。祐人は腹を括る。ただでさえ危ない人種を、ますます危ない状態にして街中に放置したら、怪我人が出るとも限らない。それにも増して、こんなのが街中に出てパニックになったらどうしようもない。

「うおっとと」

そう思考している間に、三者の無骨な拳が襲いかかってくる。まだすべて躲せているが、少しずつ連中の反応速度が上がってきているようだ。

三体に囲まれていてはどうしようもない。手始めに、祐人は元・ニット帽に肘から突進し、包囲網を破る。そのまま振り向きざまに元・スキンヘッドのがら空きの脇腹を払う。体勢を立て直すと、元・ひよろ長を蹴り飛ばした。

「やれやれ」

とりあえず、人心地つく。祐人は倒れている元・ひよろ長の脇に座り込んだ。見れば見るほど、童話に出てくる鬼のようで、こうして目の前にあることが信じられない。ごつい般若にも似た顔を突いてみると、硬いが弾力があつた。

「後ろだ!!」

凜と響く声。祐人はとっさに左側に転がった。

振り返って見れば、先刻まで祐人の首があつたところに太い爪が在った。祐人に悪寒が走った。もしあのまま惚けていたら、致命的なダメージを受けていたに違いない。

「気を抜いちやダメじゃない!!」

「悪かった……」

寝首をかこうとしていた元・スキンヘッドを蹴り飛ばして声のした方を見ると、エルラガルが腕組みをして仁王立ちしていた。

エルラガルはわざとらしくため息をついてみせる。

「あたしなら絶対にそんなこと許さないのに」

「……………」

祐人には言い返す言葉もない。まだ立っていた元・ニット帽にトドメの右ストレートを入れるだけだ。

祐人は、ふらつきそうな足取りで壁際まで行くと、三体ともがまとめて目に入るようにして座った。一方でエルラガルは、三体の姿をそれぞれつぶさに観察している。

「もう動かないよな？」

祐人はエルラガルの背中に声をかける。先刻の二の舞はもう御免だ。

「死ににくくくくくなあいよおくく」

「悪い冗談はやめろって」

エルラガルが元・ひよろ長の太い腕を持ち上げてぶらぶらさせながら、低い声で声真似をする。祐人は理由なくゾツとした。なんとなくおぞましさを感じた。

「実は、そんなに冗談とも言い切れないのよね……………何、そのやる気ない返事は？ ……まあいいわ、見てなさい」

そう言うと、エルラガルは太い腕から手を離し、肩に手を置いた。目を瞑る。

エルラガルの掌がぼうつ、と淡く光った。その光は置いた肩に吸い込まれているように見える。

「何が？ ……………っ!!」

祐人の目の前で、腕が動き始めた。まずは指先が反応し、次いで手が持ち上がる。一指一指がそれぞれバラバラに動き出す。肘が上がり始めたところで、電池が切れたようにぱったりと停止した。

「こんなもん。どう？」

エルラガルが笑顔で見てくる。

流石に笑顔で対応することは不可能だ。祐人は苦笑いを返しておく。果たしてきちんとそう見えているかは不明だが。

「言いたいこと、わかってるわよね？」

エルラガルが祐人の目を真っすぐ見てくる。こんな状況に至ってもいつもと変わらない目。

正直言うと、分かってない。グロテスクに蠢く指しか記憶に残ら

なかった。

「あーもう!!」

エルラガルがガシガシと髪を掻きむしった。腕組みをして、歩き回る。

「どうしてあの腕が動くのか、とか不思議に思ったりしないの？」

「……そんなこといちいち不思議に思うようなら、エルラガル、お前の存在の方がよっぽど謎だぞ」

「ほおー？」

コワイ。目がコワイ。エルラガルの後ろに般若が見える気がする。今更後悔してももう遅いのだが。

ここは、話を切り替えるしかない。祐人は常識の通用しない相手に挑戦する。

「そっち側の方としては、この状況はどう考えるんだ？」

「そっち側も何も、祐人自身、含まれてるんだけど」

むむむ、と唸りながらもエルラガルは続ける。

「こんな風にはならないけど、祐人だって似たようなもののよ」

「はあ!? こんな化け物と一緒にするなよ」

祐人は一応普通の人間のつもりだ。目の前に転がってるおとぎ話の住人と一緒にされては困る。というより心外だ。

とは言ったものの、じとつとした視線を送るエルラガルを見ると、不安な気持ちが湧き上がる。そんな祐人の気持ちを察してか、エルラガルは大きいため息を吐いた。

「この世界の住人で、かつ超越者である、という点で同じでしょ」

「超越者? あれはただの化け物だろ」

「先刻見てたでしょ! あたしが触らないであいつの指を動かしたところ」

おそらく記憶に深く刻まれてしまったであろう、あの動きにそんな意味があったとは、思っても見なかった。

「てっきり」

「あたしが遊んでたんだと思ったんでしょ」

言って、エルラガルは鼻を鳴らす。完全な凶星だ。祐人は二の句も継げない。

「あの外装は、エーテルで形成されてた。エーテルを繰ることが出来る超越者でないと、あれでは動けないわ。でも……」

「でも？」

エルラガルは眉を寄せる。

「ヘン」

「変？ 何が？」

「そこなのよ！」

言って、エルラガルは祐人の隣に腰を下ろす。そして、じっと自分の指先を見つめた。小さくて柔らかい手のひら。細く伸びる5本の指。目の前に転がる連中とは大違いの、でも同じ力を行使し得る手だ。

祐人もしばらくその様子を見ていたが、慌てて学生服のポケットから携帯電話を取り出した。開いて、液晶画面に目をくれると無意識にため息が漏れる。

「遅刻だ……」

呟く祐人を、エルラガルは感慨も無さそうに見やった。対する祐人は足取り重く、いつの間にか放り投げていたカバンを取ってくる。

「こいつら、どうするんだ」

「むう」

エルラガルは立ち上がって一番近くの元・ニット帽の前に立つ。祐人は後ろから元・ニット帽の様子を覗いている。

「死んでるのか？」

「大丈夫。まだそれほど時間は経ってないから、この外装を解除すれば生命の危険にはならないはずよ」

そう言いながら、エルラガルはしゃがんで元・ニット帽の腹部に手を下ろす。

エルラガルの手のひらが明るく輝いた。するとすぐに、外装が霧の向こうに消えるように淡くなり、消え去った。

残ったのは、眠ったようなニット帽だけだった。

「さて、さて」

かけ声をかけながら、エルラガルは元・ひよろ長と元・スキンヘッド、それぞれの外装を解除していく。

数分と経たずに、全ての外装解除が完了した。大きな外傷はないようだ。

「後は、勝手に目を覚ますでしょ」

言って、エルラガルは大きく伸びをした。

一方の祐人は、のんびりしてる場合ではない。既に遅刻は決定している。

「もう面倒だから今日学校休もうかな」

ふと振り向くと、エルラガルがキラキラした目で見てきていた。これはこれで、何かなさるのではないか、とコワイ。

「学校休んでくれるの？」

「え、と……………やっぱり学校行くよ」

エルラガルはムスツと頬を膨らませた。

14 こういうチマチマしたこと考えるの上手よね

授業の終了を報せるチャイムが校舎中に響いた。

怠惰な時間に割かれた束の間の休憩を少しでも満足させようとするかのように、生徒が廊下に溢れ出てくる。

その時間に高校に到着するよう合わせて来た祐人は、その生徒の中に上手く紛れ込む。

「こういうチマチマしたこと考えるの上手よねー」

エルラガルは聞こえよがしに呟いた。祐人の2歩ほど後ろを、人の流れを一切無視してつかず離れずの距離を保ってついて来る。

勿論、祐人は無視する。この学校という閉じられた場所で（エルラガルは見えていないので）、独り言をブツブツ言う（ように見える）のは気が引ける。というか後々よろしくない話になるのは本位ではない。それを知ってか知らずか、エルラガルもそれ以上深くは追求してこなかった。

所属するクラスに到着したのは、2時限目が始まる3分前。急いで席に着く。

祐人は、今月の席替えくじ引き争奪戦で、窓際後方2番目という最強の布陣を手に入れていた。だが、今月もあと残すところ五日を切った。このベストポジションの返還期限が差し迫って来ている。

これも世の流れ、と受け入れ……られるはずもなく、あれこれと模索中だった。

「やほー」

隣では、ぐーぱーぐーぱーしてあいさつと見える不可解な声を上げるクラスメートがいる。

「面妖な」

「あ？ ああ、おはよう」

エルラガルのつぶやきは無視して、祐人はとりあえずあいさつしておく。残念ながら、朝一番に、隣の席の女子から昨日までは影も形

もなかった新しいあいさつと思われる行為に対する反応を求められて、即座に反応出来るような人間ではない。

だが、彼女は祐人に対して過大な期待を持っていたようで。

「内藤クン？ 今日ほノリが悪いね」

と、肩のあたりまで伸ばした髪を散らして、彼女は勝手に不平不満を押し付ける。

「無う理無理。古関ちゃん、内藤はそういうの得意じゃないんだから、あんまりイジメちゃダメだよ？」

「山本お」

声のした方を、声の主はだいたい予想がつくが、祐人と『古関ちゃん』と呼ばれた、隣の席の少女——名前は『紗弥』と続く——はほぼ反射的に振り返る。

「おうやおや、内藤サン。凶星を突かれてお怒りですか？」

予想に違わず、声に似合わず、解りづらい声マネをするのは、山本衛稀その人だ。

ちよつと頭に來た。何が、と特定はしないが、イラつく。

ちようど目の高さにある、山本のみぞおちを祐人は手刀で払う。

「うぐほおっ！」

みぞおちをおさえ、大げさに倒れてうずくまる山本。

この2ヶ月弱、何かある毎に繰り広げられてきた光景に、周囲の誰も、興味関心を抱く様子はない。

そうこうしている内に、授業開始を報せる、絶望のチャイムが響き渡る。

「いつまでもその辺に転がってもらっては困るんですが、山本サン。目障りなんで早々に自分の席に帰っていただけますかな」

祐人の最期通牒宣告。

しかし、山本は手刀を受けたみぞおちを庇いながら、ゆっくりと立ち上がる。

「!!?」

祐人は驚きを禁じ得なかった。その表情は、苦悶一色、というわけ

ではなかったからだ。苦痛の中に一条、光のように、勝利を確信したような笑みが走っていた。

内藤、と言って山本は笑みを薄く浮かべる。

その声に、古関も含めたクラスメートたちまでもが一斉に振り向いた。

山本は苦い表情だが、身体を真っ直ぐに起こした。そのままの姿勢で数秒、周囲のその視線を十分に、満足するまで満喫する。そして、山本は大仰に口を開いた。

「お前は大きな間違いを犯した」

「……………は？」

あまりに突拍子もない山本の発言に、祐人は絶句した。

周囲のクラスメート達も同様のようで、教室中に時間が止まったかのような空気が流れる。

「短気は損気と言ってだな、すぐに手を出すから大切なものを失うんだ」

「……………」

奇妙な空気が教室全体に生まれていた。

簡潔に言えば、言い負かしたい、むしろぶん殴りたい、といった衝動。

それはおそらく、4月当初から担任が事ある毎に言っていた、しかし生まれようのなかった一体感とか協調性とか、一致団結とかいうもののだろう。だが、

（こんなことで実感しなくてもいいじゃないか）

との思いがクラスメート達の頭の中をよぎっていく。

そのうち、山本は流石に、自分を除く教室が団結していることに気づいた。

「まあ、今日のお前は不幸だろう、ってこ、のうっ!!」

山本は変なかけ声を残して、祐人の目の前から消えた。

それと前後して現れるのは、小柄な少年。大柄な山本の体躯の後ろでは、立っているのも見えていなかったのだ。

足元を見やると、山本が奇跡的な姿勢で転がっている。

両膝の裏を一度に払われることで、身体のバランスを失って驚いている間に、背中側に崩れ落ちざるを得なくなる――要するに、山本は足カクンされていた。

「見苦しいよ、山本」

微笑んでいれば、黙っていても他人に好感を抱かせるような端正な顔立ちが、他人を愚弄する時のそれに変わる。整っている分、その蔑みの表情は、必要以上に恐怖をかきたてる。

彼の名は、寺内毅。小柄な体躯ながら大柄な山本をも御し、未だに腹の底が見えない男だ。

「寺内、キサマっ……」

「ん、口答え？ チャイムが鳴ったのに、ぎゃんぎゃん騒いでるのは良くないよね」

「えっ私!？」

突然話題を振られた古関は、びくと跳ねた。その拍子に持っていたシャーペンを取り落とした。

「!?!？」

「あ、ゴメン」

簡素な凶器となったシャーペンは、未だに立ち上がらない山本のスリッパに突き刺さった。

一瞬、山本は何が起きたか解らない、といった様子を見せた。が、すぐに持ち直すと、スリッパに手を伸ばした。

「危ないじゃないか、古関ちゃん。俺が足の甲を鍛えてなかったら怪我してたかもよ」

シャーペンを手に取って手の中にくるくる回しながら、山本は言う。「そのまま貫通してしまえばよかったのに」

「てか、足の甲なんてどうやって鍛えるんだよ」
「ぼそっと寺内と祐人は毒づいた。それに目ざとく、もとい耳ざとく気づいた山本は二人を軽く睨みつける。」

「ありがとう」

山本から引つたくるようにシャーペンを受け取ると、古関は早口で続けた。

「そ、そうだね。いくら自習だからって騒いでたら、きっと先生に怒られちゃうよね」

普通の反応じゃないか。祐人はそう思ったが、追求するとやぶ蛇に成りかねない。

「……自習？」

呟いた祐人の疑問詞に、寺内と山本、古関はそれぞれ、別の表情にさっと変わる。状況の好転を確信する喜びと、失敗を悟る苦いものと、自らが変化させてしまった後悔とに。

3人の表情を、祐人はじっと見比べる。そちらに目線向けると、3人それぞれ、意味合いは違うだろうが目をそらす。

「……はあ」

と、祐人は軽いため息をもらした。

道理で、チャイムが鳴っても山本はなかなか席に戻ろうとしないはずだ。そのうえ、寺内もオマケについて来て。

しかし、祐人にはまだ解らない点がある。たかが自習で、それほど重要な60分なのだが、そこまで祐人にひた隠しにしようとするのか、だ。何もせずに放置しておけば、10分、20分くらいは無駄な時間を過ごさせることができていたはずだ。

「この時間は自習なんだ？」

「お、おう」

山本に、至極普通の口調を装って訊いただけなのだが、その答える声はどもっていた。

祐人はますます、何かを隠している、との確信を深める。だが一方で諦めている部分があるのも事実だ。

「次は英語か……」

山本から時間割に目線をずらして、祐人はつぶやく。もちろん、視野の端に山本を置いておくのを忘れない。

視野の端で山本がほう、と息を吐く。それと時をほぼ同じくして、

古関と寺内の顔からも緊張が解けた。古関は緊張の解けた、ふにゃふにゃの顔で机に突っ伏すと、英語の教科書を取り出した。

「おら失せろ」

シッシッ、と祐人が山本と寺内を手で追い払っている隣、教科書のページをぱらぱらめくりながら古関が憂鬱にひとりごちる。

「さあて、私も英語の復習しないとなあ」

引かなかった。祐人の中で異様なまでの違和感が噴出した。それで、無意識の内に祐人は言葉を繰り返していた。

「……復習？」

帰りにかけた、山本の足が止まったことにすら、祐人は気づかなかった。

まず、古関は授業前に英語の勉強をするようなマジメな人間ではない。まあ、祐人も他人のことを言えるような真人間ではないのだが。これが違和感の原因だと思った。だが、無意識に出た言葉をもう一回なぞってみる。

「今日か！？ 英語の小テスト！！」

思わず出した大声に、近くの古関はびくんと跳ねた。1テンポ遅れて、盛大なため息が響いた。ため息の聞こえた方を見ると、山本が額に手をあてている。

「ああ、もう、古関ちゃん。全部バラしちゃったよ」

「私のせい！？」

ガバツと飛び起きると、古関は山本に不平を訴えた。

「最後にバラすなんて、ヒドいよ」

「別に隠して、なんて頼まれてないし」

「でも途中まで楽しそうに参加してたじゃんかよ」

「うっ、結構傷つく」

「あのー、隠されてた俺への弁解とかは……………ありませんかね、はい。ありませんね」

後ろで傍観を決め込んでいた寺内は、山本の肩をそっと叩いた。

「内藤にみぞおちをえぐられ、クラスでは浮きまくり、シャーペン

が刺さった場所は鈍痛だし、しょうもない目標は達成できず。不幸に魅入られたのは山本、君自身なんじゃない」

怒りを露わにして山本が振り返ると、寺内はもうそこにはいない。

仕方なく直った山本は、はたと気づいた。嫌な空気と、机にかじりつく古関と慌てて教科書を開く祐人と。

教室の扉がずっと開く。

ゴゴゴゴゴ、と効果音が鳴りそうな雰囲気をもとわせて、1m90はありそうな巨体が開かれた教室の扉から現れた。

「何を騒いでるッ!!」

「えっ、オレ!? 違います誤解です!!」

山本は襟首を掴まれると、教室から退場させられた。

15 だって、つまんないんだもん

硬いものに固いものがぶつかる音。次いで、ガチャガチャとドアノブをひねる音。また、悲鳴のような激しい音。それが断続的に続く。

「おっかしいな……」

くぐもった、祐人の声。だんだん、その悲鳴が大きくなる。

そのうち、

「ふんっ！」

と、祐人のかけ声と共に、もうたまらずステンレスの扉が吹き飛んだ。

一步、外へ。

今にも雨が振り出しそうな曇天に厳しい目をくれると、祐人はひとつ、ため息をつく。

すぐに振り向くと、軽く「く」の字型に曲がった扉に手を掛ける。

「蝶番がバカになってたんだな……誰も来ないことになってるからって、管理に手抜きはダメだろ」

場所は校舎の屋上。時間は昼休み。祐人の言うとおり、屋上は立入禁止ということにはなっている。だが、校則のどこにもそのことは明記されておらず、言うなれば教師と生徒の間の暗黙のルールではない。天気がよく、暇ならここで弁当をつつく奴らもいるし、放課後に告白するスポットになったりもしている。

祐人はその因縁のある屋上の扉をこじ開けて出てきたところだった。

さすがに、この天気では誰も屋上に上がって来る気力はなかったようで、屋上にいるのは祐人と、半透明で浮遊するエルラガルだけだ。

「眠っ」

大きなあくびをかみ殺して、エルラガルが呟いた。

エルラガルにとっても、高校の授業は眠りを誘うようで、大概寝ている。それだけならいい。他にも寝てる連中なら掃いて棄てるほどの。だが、無性に腹が立つのは、エルラガルが祐人の席の隣、つまり窓の向こう側で、浮遊しつつ気持ちよさそうに惰眠を貪っていることだ。

「先刻まで爆睡してたろ」

何を言っても八つ当たりになりそうなので、祐人は当たり障りのない所で濁しておくことにする。

「だって、つまんないんだもん」

各方面から非難が山のように寄せられるに違いない言葉を吐き捨てつつ、エルラガルは目尻に溜まった涙をぬぐった。

それを脇目に祐人は、実体がないエルラガルがぬぐった涙はどうなるのか、などと頭の片隅で考えている。

実体のないものから出たものは実体ではないだろう。まずこれはいい。次に、涙として形成された実体のないものはどうなるのか。本体たるエルラガルは壁ぬけ、空中浮遊、何でもやってのける。その代わり、物に触れることはできないのだが。

ならば、涙は周囲の熱をも受けつけないので蒸発することもない。かといってずっと指に付着し続けておくわけにもいくまい。

とすると、『本体から切り離してその辺に放置する』か、『付着した箇所から水分を吸収する』かしかない。前者を採用すると、エルラガルはそのうち涙が枯れるか、だんだん潤いがなくなっていくことになる。転じて後者では、エルラガルの身体構造はヒトとは違うことになる（実体がない時点でヒトの身体構造とはかけ離れてはいるのだが）。

それらの案は実状とはかけ離れているとしてすべて否定するとしたら、残るのは一番自然だが到底承伏できない案が残る。それは、エルラガルが自ら

「なんか」

エルラガルが、祐人の思考に割って入った。

「へんなこと考えてない？」

祐人は弾かれるように声のした方を見ると、眉根を寄せた怪訝な表情がそこにはあった。

その空色の輝きはあまりにも純粹で、

「別に。先刻の英語の小テストのこと考えてただけだ」

と目線と話題を遠くに放り投げることしかできない。

エルラガルが頬を膨らませて不機嫌そうになったのは分かったが、祐人はとりとめのない話を続ける。

「山本の一芝居のせいで一時はどうなることかと思ったが、なんとかなりそうで良かったな。定期試験で赤点取っても小テストの結果次第で救済措置があるそうだから、逃したくなかったんだよ」

エルラガルの反応はない。

「拉致られた山本は結局、ほとんど復習できなかったとか言ってたが、あの様子だと間に合ったようだな。名前書き忘れてればいいのに」

愚痴るが、エルラガルは完全に無視だ。

これはマズかったか、とは思ったが自分から折れるのもしゃくなので祐人も押し黙った。

屋上の手すりに寄りかかって、別棟の校舎を越して周囲の景色を見下ろす。

祐人の在籍するこの県立丹羽高等学校は、俯瞰するとたて棒の短い『コ』の字型に見える。また、住宅地が連なる小高い丘の頂上に建っており、そこから東方面には、高層ビルの建ち並ぶ商業地が広がっている。

高層ビルを眺めつつ、気まずい沈黙が続くこと数分。

「こんなとこにいたのかよ」

振り向かずとも、声で誰かわかる。山本だ。先刻までの諸々の事情は、すっかり忘れたらしい。全く都合の良い頭だ。

「こんな天気なのに屋上で何してんだよ。飯喰おうぜ……って、あ
！！」

祐人の方に歩いてきていた山本はわざとらしく、手で口を覆う。もちろん、数歩後ずさりすることも忘れない。

「内藤、黄昏てんのか？」

「……は？」

「何だ、悩み事か？ 小テストの出来具合があんまりだったか？」

それとも金欠か？ 貸すつもりはないが。いやいや、まさか、恋か、恋なのか！？ 恋わずらいな痛ッ」

裏拳が見事に決まった。

早足で駆け寄って来ていた山本は、勢いそのままにすっ転んだ。それを横目に、ガシガシと髪を掻きむしる。

「何だってんだよ、騒がしいな」

山本はあくまでもわざとらしく、足元でピクピクと痙攣している。とりあえず、わき腹の辺りを蹴ってみる。

「はんのうがない。ただのしかばねの痛ッ」思い切り蹴った。

その後、2分と経たず山本は復活した。

みんなさ、と山本は切り出した。

「俺に対する扱いがヒドくない？」

「そうか？ 今の対応でも皆我慢してる方だと思うぞ」

「ガマン！？ 何処に！！」

「そういう、自分を完全に信じてるところは、本当に尊敬に値するよ」

「それ褒めてる？ 褒めてないよな？」

「いやいや、純粋に底から羨ましいと思ってる」

「ホントか？」

「ホントだとも。強いのか、バカなのか、こればかりは判断しかねるけど」

「なっ！？」

一瞬こらえての、爆発。笑い声が寂しげな屋上に満ちる。

山本が祐人の肩をバンバン叩いてきた。

（悪い奴じゃあないんだが）

祐人にもたれかかって、他人の髪を掻き回してくる。山本は祐人より頭半分位背が高いので、とりあえず目についたことをしてるだけなのだろう。だが、ワシヤワシヤされてる祐人の方は腹が立つただけだ。

山本の手を払いのけると、勢いよく身体を押し返す。

「そういえば、何でここに来たって？」

「昼飯喰おうぜって」

「あー」

祐人は即座にポケットに手突っ込む。指は空をつかむばかりだ。途端、今朝の出来事が祐人の頭の中をよぎった。

400円。今朝、通りがかりの人生の先輩方に献上し奉った額だ。その後で、あられもない姿になった彼らに急襲されたが、その時は昼食代の回収をすっかり失念していたのだ。

余分な金は持ち歩く主義ではないので、屋上に現実逃避しに来ていたのだが、今更ポケットの中身を改めたところで金が戻ってくるわけがない。

「昼食代、来るときに落としたのか？」

「……そ、そんなところだ」

山本の絶妙な質問に、祐人はどもってしまふ。返す言葉がないとはこのことだ。

気付かず、困ったような声で返していたのだろう。祐人が顔を上げると、山本の顔が曇っている。気まずい、なんてものではない。

「内藤……」

「何だその哀れみの眼は……！」

山本を軽く小突く。しんみりするなんて柄じゃない。ましてや昼食代を落としただけで。

「それよりお前、こんなところで油売ってたら待たせてる連中、先に

喰い終わるぞ」

「もうそんな時間か！？　じゃあ俺は先に戻ってるぞ」

山本は3歩進んで、また戻ってきた。真面目な顔で祐人の手を取って握りしめる。

「色恋沙汰なら俺が相談に乗るからな。間違っても早まるんじ」

「誰が早まるかッ」

祐人の拳をひよいとぐり抜けて、山本は今度こそ屋上を後にした。「いちいち面倒くさいヤツ」

消えた背中に、祐人は言葉を放った。そして、元から居た手すりに寄りかかる。

見上げれば、初夏のような晴天。その空色を見ると、悩ましい出来事の数々が祐人にはどうでもよく思えてくる。

と、全てを忘れそうになる直前、違和感に襲われた。

晴天。

周囲の静けさ。

屋上。

高層ビル群。

山本の発言。

壊した扉。

揺れる空色。

数々の記憶がフラッシュバックしては流れていく。その渦巻く流れの中で突然、ガバッと跳ね起きた。

「やっぱりか」

空色は、風に舞うエルラガルの髪の色だったのだ。屋上の床から数十センチ浮き上がり、腕を組んで怖い顔で仁王立ちしていた。

（先刻ごまかしたことを怒ってるのか？　なら何故誰も居ない所を睨んで……）

エルラガルの目線を追って視線を走らせた先、『コ』の字型をした学校の向かい側の屋上には何も居なかった。

そう、何も居ないハズだ。実際、アスファルト以外には何も祐人

の眼に映ってはいない。しかし、自身の勘のような部分が必死にそれを否定していた。

目を凝らして眺めているうち、祐人は向かい側の屋上の一角にゆがみを見つけた。ひずみ、と言った方が正確だろうか。

その箇所と周囲の風景が微妙にズレていた。そのズレは絶え間なく揺れ続け、一度気づいてしまうと、意識の外に追いやることは不可能だった。

「エルラガル、あれ……」

最後まで言うのは叶わなかった。ひずみから突然発せられた強烈な違和感によって、祐人は無理やり口をつぐまされた。

それは長く触れていると、違和感と言うよりむしろ、本能からの忌避感とでもいうべきものだ。

尋常じゃない量の冷や汗が身体中の汗腺から溢れ出し、頬や背中を流れていく。

校舎屋上のこちら側が現実で、眼下の緑地帯を挟んだ向こう側が、有ってはならない夢の世界なのだろうか。

エルラガルがフン、と鼻を鳴らした。

「やっと気付いたの。“ごーるでんういーく”とやらを全部使って練習したのに、まだまだのようね」

「止めろ、思い出させるな」

「今度はもっと厳しくしないとダメね。障害物込みで10キロくらい離れてても発動が感知できるくらい」

「はぁ!？」

それは、祐人の忌まわしき記憶だ。今月初めのゴールデンウィークを丸々使って、エルラガルによって祐人は“特訓”という名目で生き地獄に放り込まれたのだった。かの休日恐怖を込めて“ゴールデンウィークの悲劇”（命名・祐人）と呼ばれている。

祐人は思い切り、頭を左右に振る。過去の出来事に囚われている場合ではない。

それを脇目に、エルラガルは前方を見据える。

祐人が気付いた時点で、もう相手に不意打ちのチャンスはない。

あとは正々堂々、真っ向からぶつかるだけだ。

『やっと気づいたようだな、少年』

「ッ！！？」

しわがれ声が祐人の頭の中を埋め尽くした。頭蓋骨が内向きのスピーカーになって、脳を大音量が揺らしている。

祐人は、弱音や他の諸々が湧き上がって来ないように奥歯を噛み締めざるを得なかった。

『そちらの不思議な様子の少女は早くから気づいてたようだが、何者かな？』

また、大音量のしわがれ声。

こらえながら、隣のエルラガルに目をやる。傲然と仁王立ちして憤然と鼻を鳴らした。

「何者か？ その言葉、そのままそっくりお前に返そう。追及したい事柄は様々あるが、まずは姿を現せ。話はそれからだ」

エルラガルはどうして平然と、見えない人物に対して上からものを言えるのだろうか。なるべく平穩無事になるよう努めて、日常を過ごしてきた祐人には理解できない。

しわがれ声とは別の原因の頭痛が増えた気がする。

『おお、怖いお嬢さんだ』

その声はまるで孫のわがままにほとほと疲れた、といった様子だ。

その時は、突然訪れた。

異常な事態の発生は見慣れて、もう驚くことはないと思っていた。だが、目の前で起こりつつある現実にただただ驚愕し、真っ向から否定しようと考えを巡らせてしまうのは、常識に縛られるが故なのだろうか。

その祐人の眼前で、向かいの屋上にあったひずみが明確にひび割れ始めていた。

一ヶ所に生まれたひび割れは、時が経過するにつれて周囲に蜘蛛の巣状に広がっていく。スロースピードカメラで撮影した、ガラス戸が割れていく映像を見ているかのようにだ。

5メートルほど、ひび割れが広がっただろうか。ひび割れは植物の本能のように周囲に広がることを止め、微に細にひびが入っていた。ひびがひびだと判別出来なく、真っ白になるまで。

『さて』

再びのしわがれ声。

それに呼応して、ガラス戸のようなひび割れが、はじけた。

16 あんなに開戦の絶好の機会をくれてやったのに

粉々になったたくさんの破片は、地面に付くまでに溶けるように消えていった。

最初に見えたのは、突起物。そして筋骨隆々の肉体が、次から次へと現れた。全ての破片が消え失せた時には、かの鬼の姿が片手の指では数え切れないほど、躍動している。

「朝の連中でも手間だったのに……」

祐人の口から言葉が漏れ、頬を汗が伝う。

「何体いるんだ……！！？」

カツカツ、と軽く乾いた音が耳朶を打つ。中央に居た鬼たちがするすると脇に避けると、一人の男性が立っていた。

茶色系のトラベルスーツとスラックス。中折れ帽子を目深に被っており、顔を窺い知ることが出来ないが、杖に寄りかかるように立つ姿は、見る者を静かに圧倒する。

『12体、だ』

例のしわがれ声だ。あの男性のものに違いない。頭痛に囚われて祐人は一瞬、言葉の意味が取れず、先刻漏れた自分の言葉の答えだと気づくのに時間がかかった。

12体と言えば、朝の3体の4倍だ。ハッとしてエルラガルを見ると、やはりと言うほかない様子だった。体勢は相変わらずの仁王立ちながら、その眼は獲物を見つけた肉食獣のようにギラギラし、片方の口角が引きつったように引き上がっている。

「お前の方がよっぽど……いや、なんでもない」

触れれば切れそうな目で凄まじくは、祐人は引き下がるしかない。相手もいるのに、味方同士で修羅場を形成する気はさらさらない。つくづく、どんな状況・相手でも軽口を叩ける連中がうらやましい。

「で？」

エルラガルの言葉、たった1音。だが、こんな非道で挑発的な言葉が自分に向けて発せられてたら、と思うと祐人は背筋が凍る思いだ。だが、そう思っているのは祐人だけのようで。

『で、とは大層なご挨拶だな。言われた通りに姿を現したというのに。なあ、お嬢さん』

「何が目的だ。朝に倒した連中の敵討ちか？」

男性の笑い声。頭の中に笑い声が充満し、祐人は顔をしかめた。

『今まで刃向かって来た奴など居なかったのだな。どんな奴等かと顔を見に来たのだよ』

「顔を見た結果、あたしたちをどうするの？」

『潰す。……とでも言うと思ったか？』

「……？」

まるで解けるはずもない謎解きを出題しているかのような口ぶりだ。祐人の頭には疑問符が浮かんだ。

（こういう時は大概、派手なケンカになるものじゃないのか？）
そしてエルラガルが、倒した鬼共の山の頂上に立って高笑いしている姿が容易に思い描かれる。

（で、実は山の一番下になっているのは俺でした、でオチだな。近くにいる奴から仕留めていきそうだから、ちよっとエルラガルから距離を……）

などと考えて祐人が数歩距離を取るのを、向かい側の屋上にいる男性がめざとく見つけた。

『もう逃げる算段か？ 選択肢として間違いだとは言わないが、小さな女の子1人残して逃げるのは戴けないな』

ゆっくりと、エルラガルが身体ごと後方を、祐人の方を振り向いてきた。

ゆっくりと、腕組みしていた腕をほどいて、祐人の方に伸ばしてくる。

ゆっくりと、エルラガルの手が祐人の頭に回って押さえつける。

ゆっくりと、エルラガルは頭を後ろに引いた。

「頭突きは止め痛ッ」

衝撃が祐人の頭部を貫いた。

ゆっくりと、世界が回転して祐人は腰から崩れ落ちる。

エルラガルが不機嫌そうに鼻を鳴らす音だけが妙に耳に残った。

「さて」

エルラガルの軽いかけ声。埃を払うように手を叩いて、向かい側の屋上を見据えて続ける。

「あんなに開戦の絶好の機会をくれてやったのに向かって来ない所を見ると、本当に闘う気がないようね。一体何のつもり？」

『一度として此方への殺気を緩めずに居ては、誰もちよっかいを出そうとは思わんだろ。その前に、先刻すでに闘うつもりなどないと言っただが』

「じゃあ何？ 仲間にも引き入れよう、とでもしてるのかしら？」
蔑むように睨むエルラガルに対して向かい側の男性は、いやいや、と苦笑して首を振った。

『もう駒は揃いつつある。それに手間のかかるのを増やした挙げ句、統制を乱すようなことがあっては困る』

「解ってるじゃない。でもその口振りだと、まるで請われればあたしたちが仲間になるように聴こえるわよ。あたしが納得するだけの正当性をお前が持ち合わせてたとしても、このエルラガルⅡナヴィアンⅡフューラー、誰かの部下になるつもりなどない」

『正当性があるうとなかろうと、必要なら部下になるし、不要なら赤の他人だ』

「そこまで自分の力に自信があるんだ」

エルラガルの勝手な言い争いをげんなりしつつ聞き流していた祐人は、はっとした。

向かい側の屋上に立ち複数の化け物を引き連れている男性は、祐人にとって（おそらくエルラガルにとっても）見ず知らず、寝耳に水の人物だ。

（謎の人物が、何が目的かは解らないが接触してきている。おそらく

く刃向かうなと警告しに来たんだろうが、エルラガルはそれにハイ
そうですか、と応じるような娘じゃない。スキあらば喉元に噛みつ
いてやろうとするタイプだ。だから、たぶんエルラガルは相手をそ
の気にさせて乱戦に持ち込もうとしてるに違いない」

そう考えると、エルラガルが相手を貶して見下すポーズにも納得で
きた。万が一にもエルラガルが負けることなど思いもつかない。

なるほど、これが拳を使わないレベルの高い闘いか、と感心して
祐人が眺める先、エルラガルは低次元な言い争いに口角泡を飛ばし
ていた。

「あー、もういい」

そののち、エルラガルは口は交渉決裂とばかりに、態度は投げやり
に、地面を蹴った。

「こうなったら、ぶん殴って、這いつくばらせて謝らせてやる!!」
「えっ」

ちよっと見直したつもりでいた祐人は、いきなりの路線変更に驚き
を隠しきれない。

「高等戦術は？ まさかケンカ一本？」

「ハア？ 意味解んない。よしお前、そこで待ってなさいよ。 “ホ
ンモノ” がどんだけか見せたげる」

『言葉の意味が解らんが、返り討ちにしてくれる』

祐人の問いかけに答えたのは前半だけで、後半エルラガルは全力で
啖呵をきった。それに相手も乗ってくる。今ここで祐人だけが置い
てけぼりだ。

エルラガルが校舎屋上の端に片足をかけた。

後ろの祐人の方を振り向く。眼がらんと輝いている。それを
見て、見直したのは過ちだったと祐人は改めて確信する。

「祐人、行くわよ。あたしは右から、祐人は左から。大将の首は取
った者勝ち!!」

「ちょっ!？」

言うが早いのか、エルラガルは飛んだ。一拍遅れて、ほこりが舞う。

エルラガルを止める術を知らない祐人は、一体目が殴り倒されたのを見て、屋上の端に足をかけた。

一度深呼吸をして、前を見据える。二人目が倒された。

かの“悲劇”を思い出し、身体の間々まで力を込めて、祐人は飛んだ。

「!!?」

そこから先は、スロー再生した無声の動画を見ているようだった。

飛び込んでくる祐人に気付いた敵三体がうなり声をあげるように大口を開いた。それぞれ身構えて、一斉に祐人の方へ飛んできた。祐人と敵の速度で、相対的な速度は増し、距離は急激に縮まる。

一体目の拳を右手で軽くいなして、二体目に向き合う。流れのまま身体を傾けつつ、足を上げて二体目の顎を蹴り払った。

その時だ。

祐人は一瞬思考が停止した。エルラガルと目があつたのだ。彼女は敵の襟首を捲り上げていながら、その目は明らかに動揺で揺れていた。

祐人にはその意図が読み取れない。最初の二体はもう落下し始めており、最後の三体目を叩き落とせばもう向こう側の屋上にたどり着ける。

三体目の太い腕を掴んで振り下ろし、踏み台にしようと足を曲げ上げた。

「!!?」

——ありえない。

目の前の現実を、祐人は驚きで受け止めきれない。

顔のシワまでもはつきりと見える距離。そこに存在するにはあまりにも不自然なモノが、祐人の眼前に在った。

上下黒のスーツ。黒いサングラスで、どこを見ているのか、目は見えない。

しかし異様に目を引くのは、膨れ上がった両腕だ。肩からスーツは破れ、赤茶けた筋肉が覗いている。

大きな両手を握りしめ、黒スーツは、両腕を高々と振り上げた。

（ヤバい！！）

逃げようとするが、自由がきかない。慌てて下を見ると、三体目が祐人の片腕を掴み返していた。

これを狙っていたのか、などと深く考えている余裕などない。振り下ろされようとしている肉塊から、封じられた片手だけで頭部を防ぐだけで精一杯だ。

「チッ」

舌打ちが祐人の耳に、近くのように遠くのように響いた。

眼前を覆うのは、突き抜けるような空色。だがそれも一瞬で、鈍い痛みを残して祐人の意識は途切れた。

97 甘すぎ

「……と……うと……と……とゆ……ゆ……と……とゆ……
……ゆ……と……と」

いつ頃からか、頭の中で大音量が鳴り響いている。真つ暗闇で目が見えず、大音量で耳も聞こえず、周囲の状況が全然解らない。

少し時間をおくと、肌に触れて揺れる柔らかなものと、緑の匂いが鼻につく。それで辛うじて、草原のようなところに仰向けで寝転がっていることが解った。

ふと思い当たったのは、パソコン画面のバックに表示される壁紙だ。

「とゆ……ゆう……ゆ……ゆう……うと……と……とゆ……ゆ
ゆう……うと……と」

それにしてもやかましい。

祐人は思った。このまま放っておいてくれればいいのに、騒音のせいでゆっくり眠ることも出来そうにない。

（うるさい、静かにしてくれ。寝かしてくれ）

考えたというより、願ったという方が正確だろうか。

朝の目覚まし時計に相對するやうな無理強い。または、お門違ひだがやはり、そのちっぽけで身勝手な願ひは大音量の濁流の中に消えてなくなる。

もうダメか、と諦めかけたとき、祐人を悩まし続けた騒音がかき消すように聞こえなくなった。煩わしい目覚まし時計のベルが止まったのだ。ならば祐人は望み通り、ぐっすりと眠るだけだ。

眠りに落ちかけた時、

「……と……ンな……うク……う……う……ない……ク……いと……ンない……な……うク」

やかましい騒音がまた、けたたましく鳴り始まった。

せつかくの安眠はまた、妨げられてしまう。その上、完全に理不

尽な怒りで祐人は目が覚めてしまった。そして気づいてみれば、身体が無情にも、かなり乱暴に揺さぶられている。

「ンな……うク……い……いと……ンな……ン……とうク……いと……いと……ン」

三半規管も遂に振動でやられて、今までの騒音も含めて完全に耳がダメになってしまったようだ。

今までは絶叫マシン等に苦手意識はないつもりだったけど、少しずつ感覚が潰されていく中で、無茶苦茶に振り回されるのにはなかなかこたえた。

（止めてくれ、もうホントに止めてくれ。この辺が限界だ。とにかく騒ぐのも揺らすのも止めてくれ）

もう我慢——平常心と言った方が近いか——の限界だった。

一気に、

「うがああああっ!!」

感情が爆発した。

鉄棒で回転した時のように、祐人は意識が巡った。

「……………」

跳ね起きた。急に起き上がったせいか、脳の稼働が不完全のようだ。「つつ……もう、いきなり起き上がるのはヒドいんじゃない？」

声の主は、古関だった。地面にぺたんと座り込み、何やらおでこの辺りを押さえている。

「変なトコに寝てるんだもん。起こしてあげたのに、頭突きするだけでお礼もなしなの？」

「あ、ごめん。いや、ありがとう……？」

口が勝手に言葉を紡ぐが、その思考をするまでに頭が追いつけていない。うわ、怒られた。と思うのと同時に、古関の言葉を一言一句反芻する。

（……変なトコ）

未だ不平不満をぶつけ続ける古関をよそに、祐人は今更ながら、周囲を見回す。なだらかな盛り上がり一面に、手入れが行き届いてい

ないのか、雑多な草花が生え盛っている。その天辺に、街路樹にも及ばない、小振りの樹が一本だけ生えている。

恐ろしく薄い自身の意識を探ってみても、このような場所には記憶がない。

「……あの、古関、さん？」

意を決して、祐人は眼前の不発弾に声をかける。これ以上機嫌を損なえば、よろしくない事態になるのも必至だ。

「……てゆーか、内藤クンも山本クンもアレじゃない？ もう、ホントにさあ……え、なに？」

「いったい此処は何処で御座いますでしょうか」

もう訳が解らない。口から出任せの発言だ。祐人は激しく後悔の念に襲われた。

「ええ？」

笑われた。

「どこなのか知らないで寝てたの」

「起こされて始めて、寝ていることに気づいたもので」

「なあんだ」

古関は咎めるように、それでいてどことなく安心するように息を継いだ。

「午後の授業に嫌気が差して、勝手に出て行ったんじゃないんだ」

「はあ？」

「だって山本クンが、そうだって」

「あの野郎……」

「それにしても、さ」

古関が、肺に溜まった息を吐き出すように顔を伏せた。表情が見えない。

黙って祐人は耳を傾ける。

「なんだかんだ言って、山本クンは皆に好かれてるよね」

「はあ」

「何その気のない返事。まあ、いいけど。……………バカやって、友達とじゃれあって、ケンカして。でも次の日には、何事もなかったみたいに、普通に、いつもの繰り返し。でも嫌われてたら、なかなかこうは行かないよね」

古関が言い切って、伏せていた顔を上げる。祐人の方を見ていても、古関の目は祐人を捉えてはいない。祐人ではなく遠いどこかを見ているようだ。

少し間をおいて。

つい、と祐人の口から言葉が漏れ出ていた。

「……………何か、あったのか」

はっとして、古関は目を見開いた。

だがそれも一瞬で、すぐにいつもの表情に変わる。

「やだなあ、もう」

ついでに肩の辺りを小突かれる。少し強めだ。

「冗談に決まってるじゃない。それとも何？ マジに取れるほどリアルだったかな」

「そういう訳じゃ……………」

「ということは将来は、演技派女優とか？」

「……………」

「それで若いうちに惜しまれつつ引退するの。凄くない、凄くない！？」

祐人は押され気味を通り越して、完全に古関に抑え込まれた格好だ。もう、ぐうの音も出ない。

次から次へと話し続ける古関を横目に、祐人は後方の木に背中を預ける。

周囲を見回すと、背の高い雑多な草花の向こうに校舎が見えた。見紛うことなど有り得ない。丹羽高の校舎だ。それがぐるりと三方を覆っている。

（なら、ここは…………）

『コ』の字型をした校舎の中央部分ということになる。

確かに、その場所には木が植わっていて似たような様子だった。だが祐人の記憶によれば、人が隠れられるほどの障害物はなかったはずだ。

「気づいた？」

古関だ。得意気な笑みもいっしょだ。

「ここ、学校の中庭なんだよ。びっくりだよねえ、様変わりしちゃってさ」

「やっぱり中庭か。でも、何があったんだ？」

「園芸部だよ」

「演芸部？」

祐人は驚くしかない。謎が謎を呼び、疑念がぐるぐると渦巻いていく。

「この1週間くらい、毎日放課後になると中庭整備してるらしいよ」

「はあ、全然気づかなかった。それにしても、誰がそんなことやらせてるんだ？」

「生徒会からの依頼なんだって。ほら、生徒会長って変わってるじゃない？」

「なんだかスゴい人だよな」

「会長には数々の武勇伝もあるらしいよ」

祐人の脳裏に浮かび上がるのは、髪を振り乱し声高らかに陣頭指揮を執る丹羽高生徒会長の姿だ。確かにあの人になら、武勇伝のひとつやふたつあってもおかしくない。

ただ、祐人の疑問が払拭されたわけではない。

「でも、そんな人に頼まれたからってそのまま受けるか？」

「受けるでしょ。部費とは別に生徒会からお金が出て、活動できるんだから」

「なるほど。上手いこと考えたな」

「え、どういうこと？」

「経費節減して他の活動資金に回そうという魂胆なんだよ、きっと」
「それならそれで、いいじゃない。結局私たちに不利益はないもの」

「そういうものかなあ」

「そういうものだよ」

古関はまるで自分の手柄を誇るかのように胸を張る。

「やけに詳しいな。もしかして部員だったり？」

それなら祐人にも、古関の度々の意味不明な対応も納得がいった。つまりはネタ探した。日頃から何か面白いことはないか、面白くなりそうなのはないか、食欲に嗅ぎ回っていたのだろう。

「違うよ」

アテが外れた。

「園芸部に友達がいるの」

「その友達の影響か。どうりで……………」

「何か言った？」

「いや、なんにも」

当たらずとも遠からず、と言ったところか。完全にアテが外れたことにはなるまい。祐人は、ぼやいた言葉をあっさりとごまかして、周囲を見回した。

何か、ピリピリとした神経のざわめきが祐人の首筋を刺激している。何時からだったのか、分からない。ただ、ざわめきは脈打つように強弱をつけて波打っている。

怪訝な表情の古関を無視して、祐人は立ち上がった。すると、ざわめきが一層強くなる。

はっとして、祐人は見上げた。と同時に、木の枝を縫うようにして何かが、もの凄いスピードで吹っ飛んで消えた。

ざわめきが確信に変わる。

祐人には、もう嫌な予感しかしない。無意識に、被害を最小限に抑えられるように思考を巡らせる。

（古関を巻き込む訳にはいかないな。あとあと必ず厄介になる）
しかし、古関をこの中庭から遠ざけるいい方法が今の祐人には思いつかない。

先刻の素早い影に気づいたのは祐人だけのようで、古関は怪訝な

表情をしているだけだ。気づかないでいるのは恐怖心がないが、確実にとっさの反応に支障を来す。

大事の前の小事だと自分に言い聞かせて、強引にでも無理矢理追いつくことにした。

「古関、さん。もう時間も遅いですし、帰ったらよろしくありませんか」

「前から思ってたけど、何で時々敬語になるの？ 私は掃除当番の友達待ってるだけだから、言われなくても帰りますよ、と」

言いながら古関は、やおら立ち上がって、スカートについた草切れを払った。

「おーい、古関いー！ 待たせてゴメン、かえろー！」

「うん、すぐ行くー！ それじゃ」

降ってくる声に手を振ると、しゅたっ、と音が出るほど素早く片手を挙げて、古関は小さな木の下から出て行った。

古関の後ろ姿が見えなくなって数十秒、祐人は顔を上げた。先刻の素早い何かを見極めるためだ。それなのに継続して気配がするだけで、木の枝や周囲の空は何ら変わった様子がない。

だからと言って、祐人は自分の予感を打ち消すこともできはしない。目や耳に入ってくる情報と同じように、むしろそれ以上にひしひしと伝わってくる感覚を否定しようがない。

すると突然、

「ぐっ……」

鋭い痛みが祐人の脇腹を襲った。口の端から声が漏れる。一瞬意識が飛びそうになるが、祐人は歯を食いしばって、たたらを踏みつくとどまった。

「甘すぎ」

「エルラガル、お前……！」

聞き慣れた声がいつもより近くで響き、空のような青が目を覆った。上下が逆転したように感覚が狂い、激痛も伴ってどうしようもない。背中を木に擦るようにして、なんとか祐人は腰を下ろせた。

一応は、ひと安心だ。祐人の予感目は目の前で腕を組むエルラガルを指し示していた。先刻の素早い物体は彼女だったのだ。

ただし眼前のエルラガルは、今までとはちょっと様子が違っていた。高級感のあるロングワンピースからカジュアルで動きやすそうな服装に変わっているのは明らかだが、半透明でふわふわと浮いていた頼りなさがなくなっている。しっかりと地に足着けてそこにいるかのようだ。いや、明らかにそこにいるのだ。

「もっと周囲に気を配りなさいよね。あんな簡単な手にほいほい引つかかるようじゃ、この先心配だわ」

そのエルラガルが諭すように語りかける。だが一方的に被害を受けた祐人は黙っていられる心境ではない。

「まったく、自分のやったことは棚に上げて……」

「何が言いたいのか？」

エルラガルの優しい口調。しかし、祐人は感じた。物陰に隠れて爪を研ぐ猛獣が、目の前にいる。そしてその猛獣にちょっとしたいを出してしまったのだ。

「はぁー……」

と、深い深いため息をつきながら、エルラガルは目頭を押さえる。これでもか、という程の無念さが疎ましく祐人に押し付けられる。

それを振り払おうとして、祐人は反論しようとした。ちよつと気が立っていたのだろう、言葉にトゲが出てしまっていた。

「な、なんだよ」

「……命の恩人に対して言う言葉じゃないわね」

「ッ……」

涼やかな、と他人は言うだろう。しかし、それは面と向かって当事者として聞いてはいないからであって、背の高い草が生い茂るサバシナで、同じことはいえないはずだ。

「……………そ、そうだ。服装が変わったことも含めて積もる話もあるようだし、場所変えないか」

「んー？ いいけど……先刻、私が間に入ってなかったら、今ごろ

そんな平気なツラしてられなかったのよ」

「わかったわかった」

祐人はほっと胸をなで下ろした。エルラガルの機嫌はまだ直らないようだが、校内で問題を起こしたくはないのだ。

エルラガルの小さくも大きな背中を見下ろしながら、祐人は

（そういえば古関はどうして倒れてたのがわかったのか、聞き損なったなあ）

と思い返していた。

18 期待したあたしがバカだった

太陽が傾いてはきても、暗くなるにはまだ早い。ただ、まるで初夏のような陽気は着々と抜けてきている。

祐人は、エルラガルに歩調を合わせて歩きながら、開けていた制服の第一ボタンをとめた。

（ちよっと目立つな）

隣でふわふわ上下する青い髪を見ながら、祐人は思った。

住宅街のような人通りの少ないところを選んで歩いているが、一度大通り沿いに出たら何がついて来るかどうか解ったものではない。青色の目と髪の色を差し引いても、エルラガルはすれ違いの通行人が振り返るくらい可愛いのだ。

「んあ？」

祐人の視線に気づいたのか、エルラガルは細めた目で見上げる。言動が荒いところが玉に瑕なのだが。

「今日はいつもと違うな」

「そう？ 同じつもりだけどな。どこが違う？」

言って、祐人の行く手を遮るように立ちはだかると、エルラガルは胸を張った。その様子は自信げだ。

迷わず、祐人は即答する。

「その辺ふらふら浮いたりしてない！」

エルラガルは露骨に口元を歪めた。

祐人には訳が分からない。ただ、在庫もまとめてエルラガルの不評を買ってしまったことなら分かった。その在庫に買い手がつかず、売り抜けることさえ出来ないことも。

「ああもう、分かったわよ。祐人に期待したあたしがバカだった、そういうことね」

エルラガルは、やれやれと手を挙げて溜め息を吐いた。言い返してはケンカになるだけなので、祐人は口をつぐむ。

さて、と呟いて思案のポーズ。エルラガルは長々とした説明をするのもされるのも嫌いだ。その上、街のどこかに敵戦力が潜んでいて、何時戦いを仕掛けられるか分からない。

「道の真ん中で立ち話もなんだし、歩きながら、な」

固まったまま動かないエルラガルを見かねて、祐人は肩を叩いて促した。対するエルラガルは生返事だけ残して、歩を進める。

30メートルも歩いただろうか。エルラガルが唐突に口を開いた。「じゃあ、お昼頃のアレのことから話す。まったく、あんな単純な手に引かれるなんて、どんな神経してんのよ。ケンカで頭に血が上ってたから、なんてのは言い訳にならないの。先刻も言ったけど、あたしが間に入ってなかったらモロに喰らって今ごろ複雑骨折、内臓破裂くらいじゃ済んでなかったんだから。それで、その時の奴の態度！ ふっ、……って、ふっ、て鼻で笑ったの！ さも解ってたよ、その程度か、って」

「ちょっと、落ち着けて」

む、とエルラガルは眉根を寄せる。これだけで印象がガラリと変わるから不思議だ。

だが、そこで祐人はぐっと堪える。ここで押し負けては、本題に入るのが何時になるか分かったものではない。

「分かった、悪かった、俺が甘かった、助けてくれてありがとう」
そこまで早口で言い切って、

「それでなんで浮いてないんだ？」

と祐人は話をすり替えようと試みる。だが、それはエルラガルの神経を逆撫でただけだった。

「あなたねえ！ あたしが間に割って入って重傷は免れたかもしれないけど、十分大怪我してたのよ！」

「そんなにか？ 別に軽い打ち身くらいだと思ったんだが」

「ならお昼にケンカしたあと、何故夕方まで寝てたのか、説明できるの？」

「え？ 寝不足かと思ってた。触れないのいいことに、毎晩テレ

ビのリモコン代わりさせられてたし」

「うー」

エルラガルが唸り声をあげる。

祐人の言ったことは事実だ。テレビに並々ならぬ興味を示したエルラガルは、朝から晩までありとあらゆる番組を見続けた。しかし、難点が持ち上がる。物質に接触できず、すり抜けてしまうエルラガルは、リモコンの操作ができなかったのだ。そこで彼女は、最初は甘え声で、最近では駄々をこねるように喚き散らして、祐人にリモコン操作を迫った。例え眠っていても、無理に起こされて。祐人は何度か録画の提案をしたが、そのたび毎に却下され続けた。

そのため無意識に祐人は寝不足が原因だと考えたのだ。エルラガルは少なくとも負い目を感じたようだが。

「違うのか？」

「違う」

と即答。

「あの詰めを捌ききれなくて、軽く、なでるくらいだけど、祐人に当たっちゃったの」

言って、エルラガルは顔を伏せる。

（もしかして責任感じてるのか……？）

などと祐人が思う間にも、エルラガルはぼつぽつと語る。

「それで、あの木陰に隠れて修復、もとい治療作業してたの。とっさに気配消したから相手には倒したか、逃げたと思わせられたと思うけど……」

血気盛んなエルラガルにとっては、逃走まがいの行動は恥としか映らず悔しいのだろう、と肩を落として歩く彼女を見て祐人は思った。「修復作業が終わってから揺すってたんだけど、なかなか起きなくて……失敗したのかと思って……」

「アレはお前だったのか！」

「うん」

エルラガルは殊勝にうなづく。祐人はなんだかモヤモヤした気分で

いっぱいになった。やかましい目覚まし時計に文句を言ってやりたいのはやまやまだが、心配させておいて怒るのはお門違いな気がするからだ。

伏せたエルラガルの目端が、光った気がした。

「そのうち誰か来る気配がして隠れたら、あの『コセキ』とかいう女で。凄い勢いで祐人を振り回してて、祐人が目を覚まして……」
「何っ？　ならアレは古関なのか!？」

エルラガルの言葉を信じれば、祐人をヒドい目に合わせたのは古関のせいということになる。祐人はエルラガルの脳内評価を上方修正した。

「だったら、エルラガルのせいじゃないよな」

きらーん、とエルラガルの目が輝いた。勢い良く頭を上げると勇ましく腕を組む。川の奔流のように長い髪が空中を舞い踊った。

「そうね、あたしのせいじゃないわね」

今までの発言や祐人の思いやらを放り出して、エルラガルは顕然とそう言い放った。

翻って祐人は啞然とするしかない。反論するとか、真意を確かめるとかいった考えが、すっぽりと抜け落ちてしまった。

「元々の原因は祐人、あなたのせいよ」

「えっ……?」

まだエルラガルは祐人に責任を押し付けるつもりのようなのだ。

やれやれ、とエルラガルは肩をすくめてみせる。

「そもそも、バランスが取りづらい空中で戦おうとするからいけないのよ」「いや、だって」「朝の時も思ったけど、ムダな動きが多すぎるのよ。三下ならどうにかなるかもしれないけど、先刻みたいなちよっと手慣れた相手には勝てないわよ」

「それは、さ」

「もっと、こう効率良く、それでいて早く!」

「そう言われても」

「ほら!　さっさと練習!　始める!」

言葉通りに、エルラガルのストレートパンチが祐人の腹部を急襲した。

（アブねえ）

と思う間に、祐人は両手で包み込むようにして小さな弾丸を止める。ニヤリとエルラガルは不敵に笑って、2発目、3発目と次々に撃ち込んでいく。

「おりゃあ、とりゃあ」

と気の抜けるようなかけ声付きだが、エルラガルの拳は殺傷能力充分だ。

端から見ればじゃれあってるように見えるかもしれないが、祐人にとっては必至のやりとりだ。軽く入っただけでも膝から崩れ落ちて悶絶する自信があるほどの威力なのだから。

そのうち、

「とーう」

とのかけ声と共に足蹴りまで飛び出す始末だ。

右拳を払い、左拳を受け止め、右足の蹴りをギリギリでかわす。

右、左、右。右、左、右。右、左、右。右、左、右。右、左、右。

「おりゃあ、とりゃあ、とーう。おりゃあ、とりゃあ、とーう」

「ちよっと、疲れてきたかも。っと！ 左足の蹴りはズルいぞ！？」

「いつ、あたしが、左足は使わない、って約束、したのよ」

それはそうだけど、と祐人は口ごもる。勝手に祐人自身がそうだと決めつけたルールにエルラガルが従う必要はない。

その間にもエルラガルは順番を変えたりテンポを変えたりして、命中を狙ってくる。容赦というものが微塵も感じられない。祐人はじりじりと押されてきて、体力も限界だ。

と、その時、

「ここ！！」

という軽いかけ声で祐人の身体が跳ね飛ばされた。

「っつ！？」

上半身と下半身が無理やり引き離されたような激痛が祐人を襲い、

一瞬遅れて身体全体を衝撃が走り抜けた。遅れに遅れて、優雅に青が宙を舞う。

ふん、とエルラガルは鼻をならして長い髪を払った。

「痛えな、何したんだよ」

「さあて、何でしょう？」

得意気な満面の笑みで、エルラガルは手を差し出す。祐人はため息ひとつ、彼女の手を取った。

ホコリを手で払いつつ、身体に痛みがないか確認する。

「先刻まで重傷だった相手になんてことをするんだよ」

ふん、と荒い鼻息ひとつが返ってきた。どうやらそれがエルラガルの答えのようだ。

そもそも、練習と称して殴りかかってきたこと自体を指摘しないといけないのだが、祐人は気にしない。引くに引けなくなったら、エルラガルは何を壊しても突き進むだけだということを祐人は身を持って知っているからだ。立ち向かって壊されるのは明らかなのだから、自ら余計なこととはしない。だから、エルラガルに深く追求することも止めている。

例えば、現状のように手を顎に添えて唸っている時もだ。

「……今ちよっと手合わせして確信したけど」

上の空の様子で、エルラガルは口を開いた。

（またダメ出しか）

祐人は崩れそうな精神を支え直す。今度は押し切られないように、倒されて尻餅つかないように、深呼吸して身構えた。

「……追い詰められてギリギリにならないと、本気を出さないところがあるわよね？」

「……………」

「……………」

「……はあ？ 何それ」

「何ってなによ。あたしの見立てが間違ってるって言っの!？」

「別に」

何故だろうか。

反論は次から次へと思いついて直ぐに吐き出してやれるのに、祐人自身が無理やり切り上げたがっていた。胸に溜まっていくな鬱屈した気分をどうにかしたくて、ふてくされたようにエルラガルから顔を背けた。

エルラガルが付いて来るのかどうかも構わず、祐人はずんずんと歩を進める。

「一体全体なにがどうなってるのよ!？」

慌ててエルラガルは、祐人の後を追いかけた。身長差は確実に歩幅に影響を与えてくる。頭二つくらい背の高い祐人が早足で歩くと、エルラガルは駆け足にならざるをえない。

ほとんど走っているような状態で、エルラガルは祐人の後を追いかけて、

「痛ッ」

祐人の背中に正面衝突した。

9 金がないなら作ればいいじゃない

「よう、大将。今帰りか」

「マスター！？　そうですけどこんな時間に出歩くなんて、お店はどうしたんですか」

「笹原さんがいたから店番任せて出てきた」

「買い物ですか？」

「うゝゝ」

エルラガルはぶつけた鼻を撫でながら、目を瞬かせる。

祐人が誰かに気付いて急に止まったため、後ろから追ってきたエルラガルが衝突したのだ。

「豚肉とキャベツ」

「完全に私用じゃないスカ」

「構うものか」

そんな彼女に目をくれることなく、祐人は談笑している。エルラガルが脇から覗くように見やると、相手はグレーの短髪に浅黒い地肌の、得体の知れない老人だった。白いシャツに黒いスラックス。目を引く赤いエプロンをつけてビニール袋を引っさげて歩く様子だけでは、容易に正体は判り得ない。

じっと見ていたのが気になったのか、脈絡なく老人はエルラガルに話しかけた。

「よう、お嬢さん」

「よう」

オウム返しで、返答する。じろじろ見るわけではなく、興味がないわけでもなく。ただただ知り合いの知り合いとしてだけの興味。

猫なで声ではないが、小さな子供にそうするように話しかける。

「どうかしたのかな」

ふるふる、とエルラガルは首を横に振ると祐人の影に隠れた。悪い人ではないのは直感的に分かったが、子供みたいに扱われたことに

対する、ささやかな反抗だ。

だがその甲斐もむなしく、正確に伝わらなかったようで。祐人と正体不明の男性は揃って苦笑する。バカにされても、暴れ回るつもりはないエルラガルは唸り声をあげるだけで不満を発散させる。

「……誰？」

くいくい、と祐人の服の裾を引いて訊く。正体不明の人物にほいほいといつて行くのは良くない。普段ならいざ知らず、今は怪しい人物の襲撃があった後なのだから。

（操られてる様子はないからまだいいけど、無関係の人を必要以上に巻き込むのはデメリットが大きすぎる）

そんなことをエルラガルは真面目に考えているにも関わらず、祐人には理解されないのが現状だ。

正体不明の男性を手で指して、祐人は何にも考えていないような笑みを浮かべる。

「エルラガルは知らなかったか。マンションの裏にある喫茶店の主人、マスターだよ」

「マスター、マスター……」

なんとなく言葉の響きに親近感が湧いた。もつとあからさまに言うとしたら、食指が動いたようなものか。エルラガルは繰り返し呟く。

「何をマスターしたの？」

裏も何もない言い方。

エルラガルはただ純粹に疑問が浮かんで、それを口にしたただけだ。普通なら嫌みや難題と取れてしまうような質問だとしても、すんなりと受け入れてしまう。

「コーヒーと軽食だな」

マスターは思案する間を置いて、そう答えた。

ほう、とエルラガルと祐人はそれぞれ感嘆の吐息を漏らす。

エルラガルは、これまた純粹にマスターが精通していることに感嘆していた。だが祐人は、エルラガルの意地悪にしか聞こえない言葉遊びにマスターは怒らず、大人の対応でクリーンに解答してみせ

たことにだ。

「あたしは水ね。能力の指向性が水系統なの」

胸を反らして、エルラガルは得意気にマスターに語る。また困らせるようなことを、と祐人は隣で脱力した。

だが、マスターには祐人のそんな気苦労も無用なものだ。

「そうかそうか。食べ物にも飲み物にも水は大切だ。水を効率良く使えるのは凄いぞ」

「そう？　なら祐人に言ってやってよ。あたしの話、大概無視するの」

「それは、いかな」

「いかなあ」

お互い半歩ずつズレているようだが、祐人は安心した。エルラガルの警戒は完全に解けたようで、いつもの様子に戻っている。今も、くるくると表情を変えて忙しないほどだ。

非常に心優しい、尊敬の念すら覚えるマスターに厄介なモノを押し付けることになって祐人は申し訳ないのだが。

「水ってひとまとめに言うけど、ちょっとしたこと、印象がガラッと変わるの」

「冷やすと氷、加熱すると蒸気になる」

「そうだけど、そうじゃなくって。温度は勿論だけど、圧力や溶質や接するモノによって」

ないのだが、気になった。

エルラガルがマスターと会話する中で時折、祐人の顔をちらちらと窺ってくるのだ。頻繁ではないが、目が合う。かと思えば、振り切るように目を逸らす。何をそんなに気にしているのか。

直近で思い当たることは、先刻エルラガルに強くあたったことだが。

(……まさか、な)

心の中で、祐人は首を振る。

エルラガルは細やかな気配りをするタイプの人間ではない。そも

そも『人間』ではないのだが、それは脇に置いておく。祐人の見た限り感じた限りでは、他人がどう思おうが感じようが気にせずに、自身の目的にとってどれだけどの範囲まで影響を与えるか、冷徹に悪辣なまでに考えて行動する。

これを踏まえれば、羽虫程度にしか感じていない祐人に対してエルラガルが『気を遣う』ようなことはありえない。

「祐人？」

エルラガルが祐人の学生服を引っ張った。案の定、かなりの力で無理に祐人の足が止まる。

「何だよ。腕がもげるだろ」

冗談ではない。ただ、強い口調で言っても祐人の反論を基本的にエルラガルは受け付けないので、あくまでも諭すようにだ。マスターから学んだ。

「マスターのそこ、寄ってきたい」

またもや、案の定、だ。

エルラガルは自由人なのだ。これは祐人に同意を求めてるわけではなく、来い、行くぞ、という意思表示だ。楽しげに話してるのを聴いていて、なんとなく想像はついていた。

ため息をひとつ、——いいぞ、と言おうとして祐人は言い留まった。

文無しだ。

朝の出来事で昼食代を紛失していたのを失念していたのだ。おかげで昼食も食べ逃していたが、空腹も完全に忘れていた。

それに、つきあたりを曲がればマスターの喫茶店はすぐそこだ。

とにかく、祐人は一刻も早く不可能を提示するしかない。エルラガルは不可能を認めないほど横暴ではないのだから。

「悪い。金がない」

「……金がないなら作ればいいじゃない。よし、あたしの造幣局を作ろう」

表情ひとつ変えることなく、エルラガルはそう宣った。不可能は認

めても、目的完遂には手段は選ばない横暴なのだった。

横暴な手段の皮算用は続く。

「まず場所の選定、人員と機械確保。同時に絵柄作成と後ろ盾も捜さなきゃならないわね。勿論、絵柄はあたしの横顔で決定だけど、かなりお金が要りそう。おっと、手持ちがなかった。だったら、あたしの造幣局を作ろう。まず、創業に必要な建物や機械を準備。横顔入りの絵柄を作ってもらって……」

「堂々巡りかッ」

あれこれと暴れ出すエルラガルの手を取り、祐人は語りかける。

「わかったわかった。家に一度帰って財布取ってくるから、マスターについて先に行って」

「……うん」

珍しく、エルラガルは殊勝に頷く。

その肩に、しわくちやの手が置かれた。マスターだ。

「今日はオゴリだ」

「マスター!!」

エルラガルがマスターに食ってかかった。そう見えたのは祐人だけだ。彼女は正しくは、単に喜びを表現するのに抱きついていた。

端から見れば、完全に祖父と孫だ。本当、本当、と繰り返し訊いている。

祐人はエルラガルの頭越しに礼を述べる。

「すいません、マスター」

応えるマスターは、うつとうしいように手で払うのみだ。

見れば、エルラガルがマスターのエプロンを掴みながら祐人を見つめていた。一瞬目が合うと、目を細めて鼻で笑う。

（貧乏だ、器が度量が小さい、そう言いたいんだろ）

対する祐人は、マスターの手前、頬を震わせるだけで我慢する。

言い返せないのを見て満足したのか、ふい、とエルラガルはマスターを見上げて上機嫌だ。

「喫茶店、近いの？」

「すぐそこだ」

言いながら、マスターはエルラガルの肩に手を置いてエプロンから引き剥がす。そしてエルラガルは先陣を切って歩き出した。さながら部下を従え戦地を進む將軍といった様子だ。

のっしのっしと歩を進めるエルラガルに、

「おい、こっちだぞ」

祐人の声がかかった。

声につられて振り向くと、エルラガルの後方約10メートルに祐人とマスターが立ち止まっていた。

「なにが」

「なにが、って。ここが喫茶店だし」

「いくらなんでもあんまりじゃない？　そこはどう見ても他人ん家よ、バカにしないで」

エルラガルは、相手にもならないといった様子で言い放つ。

彼女の言う通り、二人が立ち止まっているのは個人宅にしか見えない一軒家の前だ。大小なりともお店の持つ華美さがなければ、勿論看板もない。本当に隠れ家といった風体だ。

「老後の愉しみなんだ。流行る必要もないし新しい客も要らない」と、マスターは言う。

だが、祐人や喫茶店の客達は知っている。新客が現れ、よく顔を見せるようになるとマスターは非常に喜ぶのだ。本人は否定するだろう。ただ、このマスターの喫茶店に居着くような物好きな客は大概マスターの人柄に惚れ込んでいる。だから分かる、とまではいかないがそう感じられる。

辛うじてそれらしい、出入口のドアをマスターが開けると、それらしく涼しげなベルが主人と客を迎えた。

内装は至って普通の喫茶店だ。茶色やグレーでまとめられた店内に、6人が座れるカウンター席と4人掛けのテーブルが2つ。カウンターの向こうには、真っ白なカップや様々な形状の食器、ウイスキーや名前の知らないような酒瓶等が並べられていた。それらの整

然とした雰囲気にもマスターの嗜好が感じられる。

そこにひとり、中年の男性客が座っていた。ベルの音に気付いて3人の方に振り向き、マスターを発見すると歓喜とも非難ともつかない声をあげた。

「マ、マ、マスター!!! やつと帰ってきた。ちょ、ちょっと今まで、な、何してたんですか!?!」

「買い物だ」

「そ、それって私用でしょ? 待ってくださいよ」

必死に食い下がるが、マスターは聞こえないフリでカウンターにいた。店番を押し付けられたかわいそうな中年は押し黙る。

祐人を見上げてエルラガルはあごをしゃくろ。

「アレは?」

自分より年長の男性をアレ呼ばわりだ。エルラガルにしてみたら、オドオドした彼のような人物は一樣につまらない部類にでもあたるのだろうか。

祐人は注意するのも諦めて、質問に答える。

「たぶん、先刻言ってた『笹原さん』じゃないか。何度か見かけたことはあるけど、名前は知らなかったな」

「そう」

「さあ、お嬢さんたちはあっちだ」

買い物袋を置いたマスターは、エルラガルの肩を抱いて4人掛けのテーブルへと案内する。連れられるまま、エルラガルはすくと腰を下ろした。その向かいには、祐人が座る。

「じゃあ、コーヒーふたつ」

祐人の注文に無言で頷くと、マスターはカウンターに戻っていく。

「コーヒーって、真っ黒で泥水みたいにマズい、っていう飲み物?」

「そんな嫌そうな顔するなよ。他はそういうものもあるかもしれないけど、マスターの煎れるコーヒーは違う」

「さあて、ね。あたしを満足させられるものかしらね」

「大きく出たな。今言ったことは撤回することになるぞ」

ハン、とエルラガルは鼻を鳴らす。だが、すぐに興味を失った顔をして、店内を見回し始めた。

目に映るのは、雑多なつながりも感じられない品々ばかりだ。世界の中のどこかも見当のつかない都市や建造物、路地裏のようなところを写した写真や、幾何学模様の用途がわからないおかしい機械、民俗学的には価値がありそうなお面や構造物が整然と置かれている。「何か気になるものでもあるのか？」

「……………いや、別に」

祐人の何気ない質問に、エルラガルは歯切れの悪い答えを返すだけだ。その言葉とは裏腹に、目が奇妙な品を追っていて興味が湧き立っているのは間違いない。

110 謝罪の仕方くらい解ってるはずよ

手を伸ばしてはみるが、非常に不安定で、脇から見ている祐人には危なっかしくてたまらない。エルラガルがやじろべえのような物に触れようとした時は、思わず祐人が腕をとってしまったほどだ。ただ、すぐに飽きてしまったようで今はテーブルに突っ伏している。

「気持ちにムラがある、って言われないか」
黙って、目だけが祐人の方を向く。元は夏空のような清々しい青い眼のはずが、日の加減で澱んだように見える。

口を開いて、空気が辛辣な言葉と共に吐かれようとしたその時、
「……………」

独特の匂いが、ふたりの鼻をついた。香ばしく、芳しく、そそのような匂いだ。

目敏い、というか鼻敏いエルラガルは、すぐにも香りの出どころを突き止める。則ち、カウンターのマスターだ。

ちなみに、祐人は見ずとも分かった。

跳ね起きたエルラガルは眼を輝かせて、マスターの手元を直視している。その目線に気付いたマスターは、がつつきぶりを手で制した。

「お待たせしました」

朴訥なあいさつ。それと共にふたりの前に出されたのは、見たところ何の変哲もないただのコーヒーだ。だが、先刻の香りを放出しているのは間違いなく、これだ。

無言でカウンターの定位置に戻ったマスターは、店番を任された笹原のグチを聞いている。

そんなことなど見向きもせず、エルラガルは目の前の湯気が立つコーヒーをまじまじと見つめている。対する祐人は、無言でそれを口に運ぶ。

(……流石だ)

と思う。

特段コーヒーについて詳しくはないからどんな種類のものなのかだとか分からないし、味覚が優れているわけでもないから淹れ方がどうか講釈を述べることもどう表現したら適切なのかも分からない。マスターの淹れるコーヒーは、そんな祐人でさえも虜になってしまう魅力があるのだ。

「飲まないのか？」

エルラガルは、全然手を付けていなかった。

「飲むって」

「なら、いいけど。井伊家は彦根だから、滋賀かな」

「意味解んない」

黙って、祐人は再びカップを口に運ぶ。業を煮やしたエルラガルは、目の前のカップを引き寄せると一気に飲み干した。

そしてすぐに、

「マスター、おかわり」

催促した。カウンターから、軽い答えが返ってくる。

「なかなか美味しいものね。気に入ったわ」

二杯目を注ぐマスターに、エルラガルは言った。機嫌よく足を前後にぶらぶらさせているのはいいが、全部祐人の向こう脛に当たっている。地味に痛い。

「でもあたし、こんなところがあるなんて知らなかったな」

非難口調のエルラガルだが、祐人には足の鈍痛の方が重要事項だ。

「それより、そろそろ俺の足を蹴るのを止めてくれないか」

「え？ 本当だ。テーブルの脚かと思ってた………って！ だか
ら、なんでなのよ」

「最後に来たのがお前が憑く前だ痛っ」

「『憑く』って言うな」

「分かったから。3月に伯父さんと来た以来かな」

「むう……なら仕方ない」

「そうさ、仕方ないんだ。そもそも、ひとりで喫茶店来て黄昏るなんて似合わないだろう」

「うん!!」

エルラガルは全身で肯定した。卑下したのをちよつとは否定してくれるか、との祐人の甘い思いを軽く打ち砕いた結果だ。

その上、コーヒーを啜りながら窓から外を眺めるエルラガルの姿が断然様になっている。赤みを帯びてきた光が差し込んで、エルラガルの色素の薄い青い髪が鮮やかに煌めき、眼は紅く燃えたように輝くのだ。現実にはあり得ない絵画の世界を幻視しているよう――

――
(イカンイカン)

祐人は寝ぼけた頭をたたき起こそうと首を振る。

「ちよつと、マスター! それなに?」

エルラガルの奇声。慌てて祐人が振り返ると、マスターの手に異常な物体が握られていた。パフェ。端的な言葉で表現するならそうなるだろう。しかし、マスターの手に握られたそれは甘く柔らかい言葉の響きとは裏腹に、凶悪で禍々しい外見をしているのだ。

「スーパードッグバンセイントマジョリティサデイスティックデストロイギャラクシーパフェ、だ」

全長はおそらく30センチを超える。逆三角形のガラス部分にはスポンジケーキやアイスクリームやゼリーや色とりどりのフルーツやらがカラフルに詰まって、

「とってつけたような名前、絶対に今考えただろ」

「なにあれ、凶器? あたしには凶器に見える」

ただそれは全長の半分程度だ。上半分はホイップクリームやソフトクリームといった軽い部類が山を成し、これまたフルーツや菓子の種類で飾られている。

「あれ喰ったら、3日は何も要らないな」

「あれ食べたら、3日は無条件に幸せね」

祐人とエルラガル、ふたりの呆けた目線のその先で、マスターはパ

フエをテーブルにそつと置く。

おずおずと祐人が口を開く。

「マスター、これは？」

「お嬢さんに、オゴリだ」

「……」

何食わぬ顔でマスターはテーブル脇に仁王立ちする。理解力がついていかないのか、エルラガルはマスターの顔を見、眼前のパフェを見て、またマスターの顔を見た。そして徐々に口角が上に引かれて目が大きく見開かれ、輝きが止まる所も知らずに増していく。

「……………い」

「い？」

「い、生きてるって、素晴らしいッ!!」

エルラガルは甘すぎる小山の中腹に噛みついた。そして噛み千切ると、そこにはくつきりとした歯型が残っていたが数秒後にはクリーム自らの重みで崩落した。

欲望のままに振る舞い、速度と量を兼ね備えるエルラガルに祐人は言葉も出ない。呆れ果てて見ていると、

「大将」

「マスター？ 何ですか」

カウンターからお声がかかった。マスターは手招きこそしないが、こっちに來い、と祐人には聞こえる。

「ちよつとマスターにお礼言ってくるから」

「ウウッ、グレアウ」

エルラガルの応答は最早人語の体を為していない。というか、聞こえてるかどうか不明だ。ため息を吐きつつ、祐人はマスターの待つカウンターに向かう。

「あんな凄いモノ、ご馳走になって」

「そんなことどうでもいいが――」

「ッ痛ッ」

いきなり襟首を掴まされると、祐人はカウンターに引きずり落とされ

た。

強かに頭部を打ちつけ、目を開けるといつになく真剣なマスターと目があった。年齢差を考えれば明らかなのに、万力のように押さえつけるマスターの腕力に対抗できない。

「いったい何を！？ まさかマスター、先刻の連中に」

「どの連中かなんてことは知らん。まず聞け」

祐人は無言で頷く。むしろ、マスターの圧力に負けて頷かされた、と言うべきか。

「大将があゝの娘とどういった関係かは訊かん。だが、今にも泣きそうな顔した娘を引き連れて、早足で駆けていくのは見ぬふり出来ん」

「はあ」

「先刻道端で会った時だ。まさか、気付かなかったわけはあるまいに」

「はあ」

「気付いていて無視していても、気付かない程興味がないにしても、問題だな」

「はあ」

「……はあ、はあ、って生返事ばかりだ。聞してるのか」

「……はあ」

固まる祐人に観念して、マスターは襟首から手を離れた。解放されたままの格好で、祐人は考えを巡らせる。

（泣きそう？ あゝの傲岸不遜天衣無縫の権化、エルラガルが……まさか）

「まさか、欠伸の涙じゃないですか？」

「……欠伸？」

「そう、きつとそうですよ！ 毎日が物足りないって顔してますから、エルラガルは」

そうそう、と祐人は満足げに何度も頷く。

「欠伸か。それでいいなら、何も言うまい」

「終わった！？ マスター、それでいいんですか！」

笹原の言葉を受け流して、マスターは身近なコーヒークップを手に取り、布で拭き始めた。

祐人はもう一度お礼を言ってから、テーブルに戻る。エルラガルの前にあるカラフルだった小山は、無惨に荒らされて半分ほどになっ

ていた。

「何よ」

無意識に祐人の眉が寄っていたようだ。

首を横に振ると、エルラガルはもう興味を失ってパフェに没頭している。一時も手を休めることなく、一心不乱に柄の長いスプーンを動かし続ける。

（思い過ごしだろう）

祐人はそう思う。

（エルラガルが泣きそうだった？ 想像もつかない。朝の小競り合いでも、昼のケンカでも心底楽しんでいたじゃないか。きっと、その反動で疲れただけなんだ）

む、とエルラガルが顔を上げた。

「……何よ」

「何でもないよ」

「ずっとこっち見てた」

「見てないって」

「見てた。あ、もしかして……」

ニヤリとエルラガルは笑った。テーブルの反対側に座る祐人は、背中に悪寒が走り抜ける。

「な、何だよ」

「そうよね。やっぱり、そうなるわよね……うん、わかった。しよ
うがない！」

「話が見えない……」

ひとりで勝手に喜んだり悩んだりしているエルラガルに、祐人は完全

に置いてけぼりを喰らった形だ。何が起ころうとも、スプーンは着実に山を切り崩していつているのだが。

「なかなか言い出せないことってあるわよね。いいって！　みなま
で言わない、わかってるから」

「非常に良くない感じがするのは俺だけか？」

「ふふん、まったく、らしくなってきたじゃない。お昼に瞬殺され
たのが、それほど気に食わなかった？　うーん、どこから始めたら
よいものか。迷うわね」

「いったい何の話をしてるんだよ……」

「稽古をつけて欲しい、とかなんとか。そういうことでしょ？」

「……何処からそんな話になった」

「遠慮しなくていいって！　本気になってくれたんだから、あたし
も全力でサポートするから」

「良い台詞っぽいけど、最初から最後まで徹頭徹尾間違ってるからな、
それ！！　勘違いだから。俺は、一般人でありたいんだッ！！」

「照れない照れない」

言って、エルラガルはベリーソースのたっぷりかかったアイス部分
を喰らった。祐人がテーブルを叩いて反抗するが、どこ吹く風とい
った表情でパフェにかぶりつく。

勘違いが発端とはいえ、厄介なことになったと祐人は頭を抱えた。
かの悲劇の発端も、こんなエルラガルの異常で身勝手な盛り上がり
によって、引き起こされたのだった。その恐ろしい記憶は、未だに
祐人の心に深い根を下ろしている。

「もう、止めてくれよ……………あんな悲劇を、また、繰り返すつも
りか……」

「確かに、現在の状態で実践訓練をするにはキツイわね。『瞬殺』
されたわけだし」

「もういいだろ、忘れてくれよ」

「解ってないわね」

エルラガルはスプーンを動かす手を止めた。

「現在の自軍と敵軍の状況を把握、確認するのは、とっても大切な
の。有利不利ってことだけじゃないんだから。相手の真意を見抜い

て、過去の戦術から次の一手を先読みして、それを利用するよう味方を配置して、でも想定外の事態に備えて遊軍を準備して、その全てに必要なことなのよ。それでも、その一瞬一瞬の状況によって、不安定なゆらぎの中で、最善の選択肢を見つけないかならない」

「……」

「分かった？ 要するに、情報は何よりも重要だってことね。それに過信しすぎるのも危険だけど。って、祐人、聞いている？」

「……」

「あまりの高尚なお話についてこれなかったのよね？ 絶望でもしてるのかな」

はた、とエルラガルはあることに気付いた。祐人の反応が鈍いどころか、何もない。

不機嫌も露わに眉を釣り上げると、エルラガルは座ったままで脚に目一杯力を溜めて、蹴り上げた。

「ツツ！？ ね、寝てないぞ、寝てない！ ちゃんと聞いてたぞ！」

跳ね上がった祐人は、慌てて早口で弁解にもならない弁解をまくしたてる。む、とエルラガルは一段と不機嫌になる。祐人が寝てたのは良いとしても、全然良くはないのだがそれは後にして、あからさまにエルラガルには嘘と解っていて、祐人もバレていると感じている抗弁を長々と語るその神経に、怒りを通り越して呆れていた。

ドン、とエルラガルはテーブルを強く叩いた。

「！！」

祐人は驚いて押し黙る。エルラガルは祐人に目もくれず、パフェをつつき、物憂げに店内の時計に目をやった。

「……謝罪の仕方くらい解ってるはずよ」

「は？」

「甘味は今食べてるから、とりあえず肉ね」

「……」

意味が分からず、祐人はエルラガルの顔を見つめる。そしてパフェを見、時計を見た。

「分かった!!」

祐人はマスターの待つカウンターに飛んでいった。

111 知ってるもなにも

「なんでこうなった……」

祐人は呟いた。隣では、パイプ椅子に座ったエルラガルが楽しそうに周りを見回したりしている。その緊張感のなさが、また祐人のため息を増幅させた。

「本当に、何か教えてくださいよ」

よくある机の反対側には、30歳前後の男性が座っている。愛嬌のある優しい顔で敬語なのだが、言動の端々に苛立ちが隠しきれないほど溢れている。

灰色一色の、薄暗く感じる狭い部屋。3人が座る机の他には、壁の方を向いた一人用の机に女性が座ってノートパソコンに向かっている。

「だから、何も知らないし、やってないって！　なんで補導されて事情聴取までされてるんだよ。おかしいだろ、いや頭おかしいんじゃないですか」

祐人も大概に焦れて言葉にトゲが見られる。

ここは、警察署内に設けられた部屋。入るときに祐人が確認した限りでは、第三聴取室と書いてあった。

くいくい、とエルラガルが服の裾を引っ張ってくる。そちらに祐人が顔を寄せると、内緒話をするように耳打ちしてきた。

「ねえ、カツ丼って何時でるの」

げんなりして、祐人は返答する気力すら失くしてしまった。

事の起こりは、3時間ほど前。マスターの喫茶店でエルラガルの食欲に驚きつつ、夕食までご馳走になった後だった。マスターに丁寧にお礼を言い、エルラガルが浴びるほど食べた肉料理のツケは必ず返す、と念押ししてふたりは喫茶店を出た。祐人の住むマンションまでは200メートルもない。マンションの敷地に入るか入らないかという時、祐人は後ろから声をかけられた。

この一瞬の判断を、祐人は今でも悔やんでいる。振り向くと地味なスーツ姿の男性が立っており、あれよあれよという間に、祐人はエルラガルと一緒に車に乗せられてこの部屋に連れてこられたのだ。その男性は今、机を挟んで祐人を疲れきった目で見ている。

たまらず、祐人の口から助けを求める声が漏れた。

「助けてくれ、お巡りさん……」

「だから、僕らが警察なんですって……」

男性の方も疲れた声で言った。そしてすぐ、何かに気付いたようにはっとしてみせた。

「よし、最初から考えてみようか！ こっちが内藤祐人くんで、そっちがエルラガルちゃんだね。僕は、筒井輝彦。ちゃんと刑事ですよ。あ、警察手帳見る？」

「いいって！！ 間違いない。何回目だ」

「ちゃん付けはやめて欲しいんだけど」

一応、返答する。これ以上こじれるのは厄介だ、と祐人は思っているのだが、隣でエルラガルは心底嫌そうに眉を寄せた。

うんうん、と満足げに頷いて、紛うことなき公僕である筒井刑事は続ける。

「最近、街の若者が失踪してるんです。現在、失踪届が提出されるだけで8件、把握してないのも合わせると二桁を超えるとされています。他の人たちは五月病だケンカだ、ただの家出だ、居るより居ない方が仕事が減るからいいじゃないか、とまともに取り合わないんですが、僕は違います。とっても嫌な予感がするんです。だから、何か知ってることがあったら教えてください！！」

「だ、か、ら、」

机に手を付いて頭を下げる筒井の顔を覗き込むようにして、祐人は言い放つ。

「どうやったら、その失踪と俺たちが関係あるってことになるんだよ！」

「刑事の勘です」

「そんな曖昧な理由で小市民をしょっぱくな、って！」

「だって、的中率高いんですよ」

「あなたたち、そのやり取り何回目？　よく飽きないわよね……カツ丼も、なかなか出ないし」

机に突っ伏して、エルラガルが眇めた目つきで言った。

（そういうお前もカツ丼のことばかりじゃないか。マスターのところで充分すぎるほど食べただろうが）

と祐人は思うが、言わない。機嫌を損なわれて暴れられでもしたら、街中ならいざ知らず、ここでは取り返しつかないことになるからだ。

だから、筒井に精一杯八つ当たりする。

「その失踪した連中の顔も知らないのに、どうしたら『何か知ってる』ことになるんだ。明日も学校はあるんだから、帰らせてください、いや帰らせろ」

「いや、話を聞かせてもらうまでは」

突然のノックで、筒井の発言は遮られる。

また新たに男性が入ってくると、書類を見せながら山崎に耳打ちしている。筒井は驚き、そして納得した表情を見せた。

「……」

「……」

祐人とエルラガルはお互いに無言で目線を交わす。

どうやら、状況が変わったようだ。それが事件として進展なのか後退なのか、祐人たちにとって有益な方向となるのかは、分からない。帰宅させてくれるのか。署内に一泊、などとなることは祐人としては、なんとしても避けたいところだ。

話は終わったようだ。一礼すると、男性は書類を残して聴取室から退出した。

「すみません、お二人とも。お待たせしました」

筒井の顔からは、何も読みとれない。祐人とエルラガルはもう一度、目線を交わして頷いた。主導権を奪われなかったためには、先手必勝だ。

「俺たちは帰れるのか？ 結局、関係者じゃない、ってことが解ったんだろ。話すことなんてないんだよ」

「カ、ツ、井。カ、ツ、井！ 食べられないなら、帰るわよ！ 食べたらすぐに帰るから」

またカツ井か、と祐人は思うが、エルラガルは存外本気のようにうだ。そろそろ諦めるべきだろうが、取り調べにはカツ井がつき物だという思い込みが頭の大半を占めていて、判断できないのだ。

「残念ですが」

筒井はふたりの話を無視して一方的に話し始めた。

「新しく失踪者が出ました。今回は、いっぺんに三人です。これを踏まえて、何か思い出すことがあれば教えてください………あ、写真ですか。現在手に入ったのは、これだけです」
反抗するのも忘れて、祐人とエルラガルは差し出された写真をまじまじと見つめる。

集合写真の一部を拡大したもののようだ。中央の人の周りに、数人の顔が写り込んでいる。それが三枚、つまり三人分の写真だ。

「この制服、金久保高校だよな？」

「そうですね。ただ、三人とも二年以内に退学してるようです……ちよっと、そんな強く引っ張ったら破れちゃいますよ」

「もっとよく見せてよ！ あたし見えない」

「エルラガルは見なくても大丈夫だよ。まだ日本人の顔、区別できないって言ってたろう」

「エルラガルちゃん……もとい、さんは、やっぱり外国の方なんですか？」

「まあ、そんなとこね」

「刑事さん、その話はあまり深く突っ込まない方がいいよ。捌ききれなくなるから」

「かなり気になるけど、止めます。事件以外の話で手一杯になるのは避けたいですし」

筒井は肩をすくめて苦笑した。早々に、エルラガルに写真をもぎ取

られて、することもないのだ。

「内藤くんは、丹羽高でしたよね」

「そうですね。金久保と霞ヶ丘とはほとんど隣同士みたいなもんです」

「エルラガル……さんは、じゃあ、霞ヶ丘なのかな？」

金久保高校は男子校だ。大半が元気いっぱい男子高生になる。逆に、霞ヶ丘高校はお嬢様専用と名高いエリート校だ。それに、留学生を受け入れているという話もある。エルラガルを見て筒井は、平凡な共学の丹羽高ではなく、霞ヶ丘高生だと考えたようだ。

だがそれを筒井は、祐人に聞いてくる。なんで俺だよ、本人に聞けよ、と思うが、

（自由さというか独特な雰囲気も含めて『お嬢様』だと思ったのかな）

とも思うのだ。だが、如何せん祐人には答えようがない。

「ええ、まあ、そんなことです」

と祐人は言葉を濁した。愛想笑いする祐人の服の裾を、エルラガルがくいくいと引っ張った。

「祐人、ねえ、こいつら見たことない？」

「嘘だろ！？」 俺はそんな連中を見たことないぞ」

祐人は慌てて、エルラガルから写真をもぎ取らず、丁重に借り受ける。

目から離してみたり、近づけてみたりするが一向に判らない。エルラガルはまだ合点が行かないような顔をしているが、思い当たる節があるらしい。祐人は置いてけぼりを喰らったようで、なんとなく癪だ。目を細めてみたりしてみたが、やはり無理のようだった。

「解った！！」

いきなり、祐人から写真をもぎ取って、

「何か書くもの！」

筒井からペンを渡されると、写真に覆い被さって、遮二無二書き殴り始めた。

「その写真は、たしか替えは無かったはず……」

「諦めなよ、刑事さん。もうエルラガルは止められないよ」

祐人と筒井が見つめる先で、エルラガルは一心不乱にペンを走らせる。今までずっと無言で、パソコンに向かっていた女性も振り向いて、エルラガルを見ている。

その後、ガリガリと紙を引っ掻く音が止み、エルラガルが満足そうに顔を上げた。

「これ見て」

ずい、と悲惨な落書きを受けた写真が祐人に突き出された。受け取る前に、

「あ！ こいつら、今朝会った連中か」

祐人は気付いた。

ひとりは髪の毛を覆うように書き込まれ、帽子を被っているようだ。同様に、もうひとりは頭が削られて顔の輪郭がはっきりした。そして最後のひとりは、髪の毛が付け足されて頬がこけていた。

「そうよ。やっぱり祐人はダメね。ダメダメね」

エルラガルは得意げに胸をそらせた。筒井は、真意を掴み損ねているようで怪訝な顔をしている。

「いったい、どうなったんですか？　つまるところ会ったことはあるんですか、ないんですか？」

「……ある」

うめくような声で祐人は肯定した。その隣で、エルラガルは肩をすくめた。

筒井は飛び上がらんばかりに驚き喜んで、机を平手で何度も叩く。

「ほら、やっぱり、会ったことがあったんだ！　言った通りだ！　何か、何か知ってるんですね！？」

勝手にアクセルを踏み込んで、筒井がヒートアップしていく。ほとんど怒り狂っているような状態であって、祐人は首をすくめて嵐の過ぎ去るのを待つばかりだ。

「知ってるものにも、今朝ケンカした連中よ。雑魚だったけど」

（エルラガル、お前……!!）

筒井がますますヒートアップする。さらっと答えたエルラガルに、
祐人の嘆きや怒りは届くまい。

（そんなこと言ったら、まるでケンカした後放置したから行方不明
になったみたいに聞こえるじゃないか）

「そうなんですか？　だったら、三人のその後については知らない
ですか」

「知らない。息はあったから、死んでないとは思うけど」

（他の失踪者は『死んでた』、あるいは『殺した』ようじゃないか）

「先刻エルラガルさんは『ケンカした』って証言してますが、ふた
りで、ですか？　つまり2対3で、勝った」

「そんなとこね。楽勝だったわ」

（そこで強さをアピールしてどうする！？　ますます心証が悪くな
るだろうが）

「ところで、訊くの忘れてましたけど、この三人とは初対面ですか」
「うん」

「どこで会って、ケンカしたんですか」

「詳しくは分かんないけど、ビルの隙間かな。ちょっと広くなって
たところ。そういえばあいつら、あたしのこと『小学生一人増えた
ところで何にも変わらない』とかなんとかって！」

（見ず知らずの人間にバカにされてケンカ。そして勝利だなんて、
ヤンキーかよ。それでもって、警察の心証が奈落の底だよ。それに
調書取るのにキーボード叩くスピード、早すぎだって）

「つまり、初対面の三人にバカにされたことで激昂。ケンカに発展
するが、一方的な展開になり、暴行。その後、三人はそのまま行方
不明になり、失踪届が出された」

「正確ではないけど、完全な間違いではないわ……」

「ちょ、ちよっと待ったあああッ！！！！」

祐人は通常にはない大声で叫びながら、パイプ椅子から立ち上がった。

いきなりの出来事に驚いたエルラガルと筒井、パソコンで調書を作っていた女性は、祐人に目を取られた。一拍遅れて、パイプ椅子が倒れて派手な音をたてた。

112 普通は驚いて否定するんだって

「いったいどうした、内藤くん!？」

「祐人、どうしたの」

慌てた筒井は、祐人の肩に手を置いた。エルラガルは、興味津々に祐人に訊いてくる。

「……!!？」

はっとして、祐人は我に返った。狭い聴取室に居る全員が、それぞれ違う思惑を含みながら、祐人をまじまじと見つめていた。

「俺は、いったい……はっ」

（——「ちょ、ちょっと待ったあああッ!!!!!!」——）

恥ずかしさで耳まで真っ赤に染まる。

だが、この状況で祐人は立ち止まっていられない。進むも地獄退くも地獄なら進むしかない。なにせエルラガルの発言によって、非常に悪いポジションに置かれているのだから。

一度、大きく深呼吸する。祐人は筒井を見、エルラガルをまっすぐに見た。

「全部、話すしかないんじゃないか」

「……何を？」

「全部だよ、全部。エーテルとか昼の件とか何もかも。もう俺たちの手に負えるレベルじゃなくなってる」

エルラガルは、黙って祐人の目を見る。その澄んだ目は心の奥底、本人が気づいてすらいない感情のゆらぎさえも見通すかのようにただ静かにあった。

見つめられて、たじろぐ祐人を見ながらエルラガルは心の中で、軽くため息をついた。

（ちよっと祐人には荷が勝ちすぎだったかも……しかし、この男に話してもいいのかな。ちよっと気になるけど）

「祐人。あなたがいいと思うなら、あたしは構わない」

エルラガルは、いつもとは打って変わって静かで、ゆっくりとした声だ。祐人はほっと胸をなで下ろした。

「でも、全部話すの？ この男がその話を理解できると思う？ 祐人だって納得はしてないんでしょ」

(すっかり忘れてた……)

不敵な笑みを浮かべるエルラガルに、祐人は返す言葉もない。話したところで信じてもらえるかどうかは分からないのだ。

だが、立ち向かうしかない。祐人は腹をくくった。

「ちょっと三人で話ませんか」

「その三人は、内藤くんとエルラガルさんと僕ってことですか？」

筒井は明らかにむっとした表情だ。筒井は刑事でここは聴取室なのだから。

祐人の真剣な顔を見て、筒井は何か切羽詰まったものを感じ取ったようだ。パソコンに向かっていた女性を呼ぶと、二言三言声をかけた。始めは困惑していたが、女性は頷いて、祐人たちに目礼して聴取室から出て行った。

「彼女には、休憩時間ということにしてみました」

「助かります」

おそらく重要参考人に当たる祐人の頼みを易々と受け入れるのは、簡単にはいかないことだろう。祐人はそう思って、深々と頭を下げてお礼を述べた。

だが、筒井は苦笑いを返してきた。

「先刻もお話した通り、周囲の人たちはこの件に興味がありません。彼女も同様で、無理に頼んだだけです。女の子もいますし」

と言って、エルラガルの方に目をやる。そのエルラガルはパイプ椅子を傾けて遊んでいる。

つまり、祐人が勝手に解釈して独り合点した結果だった。長い、長いため息が祐人の口の端から漏れた。

筒井は、笑みを投げかけてくる。

「では、どんな話を聞かせてくれるんですかね」

「祐人は氣力がゼロみたいだから、あたしが話しようか」
魂が抜けたように机に突っ伏した祐人を突っつきながら、エルラガルは言った。

「先に言っておくけど、これから話すことについて信じるも信じないのも、聞き手の自由。でも、これを知っておいてもらわないと次に進めないってただだから」

筒井は深く頷いた。それを受けて、エルラガルは続ける。

「まず、世界には“エーテル”って名付けられた観測不可のエナジーが充満してるの。エーテルは指向性のあるエナジーという別称があるんだけど、それ自体では、ただ『在る』ただだから何の役にも立たない。でも、あたしたちのようにエーテルを利用することで、一般的には不可能だと考えられることが可能となる集団がいる。そういう能力を持つ個人を、ヒトの限界を超えた者、“超越者”^{ダイモン}と呼ぶの」

「……そんなマンガみたいな話を信じろ、と？ 信じられるわけないですよ。冗談を言ってる場合じゃないってわかってますよね」
筒井は明らかに、今日一番イライラしている。

だが、対するエルラガルはキラキラした満面の笑みを浮かべた。
祐人の背中をバンバンと強く叩きながら、喜びをいっぱいに表した声をあげる。

「ほら、やっぱり！ 普通は驚いて否定するんだって！ 祐人が変なのよ。あの時に、何て言ってた？」

「あ、あの時？ 2ヶ月くらい前、エーテルの話をされた時のことか。『そうですか』のような感じだった」

「違う。祐人はあの時、最後まで聞いて『へえ、さいですか』って言うだけで、大半は聞き流してた」

「そうだったかな……」

躍起になって否定しなかったことでエルラガルに文句を言われるとは、祐人は想定だにしていなかった。本気で、エルラガルに対する反応を考え直す必要がありそうだ。

悩む祐人に、イライラが募る筒井は高圧的に切り出した。

「そのエーテルが一体、若者たちの失踪とどういう関係になるんですか」

「詳しくはちよつと……ただ、間接的な関係性は話せる、と思うけど」

言って、祐人はエルラガルの顔色を窺う。

その目線に気付いたエルラガルは、しっかりと頷いた。祐人がどう考えているのかをエルラガルが把握するためだ。

「今朝の話なんだが、登校中にエルラガルが何かに気づいたようで、路地裏に消えていったんだ……」

祐人は今朝と昼に起こった出来事を、筒井にかいつまんで説明した。もちろん、納得のいかない顔をしている。初めてそんな話を聞かされたら、誰だってそんな顔をするだろう。

それでも筒井はなんとか理解しようと頑張っているようだ。

「その『鬼』みたいなものが、写真の三人で、エーテルとかいう何かによってその形状になった。それらは、昼に接触してきたある男性の思惑によるものらしい。そういうことですか」

「要点だけ言えば、そういうことね」

エルラガルは腕組みしながら、頷いた。

「エーテル操作は、そもそも人体の能力の範疇にはないの。だからこそ“超越者”よ。そこで、その補強、もしくは底上げとして鎧のようなものを組み上げる必要がある」

「宇宙服みたいなものか」

「それ、あたし知らない」

祐人の合いの手もむなしく、エルラガルに袖にされる。筒井が感心したような顔をしているから、まあよしと祐人は気を取り直した。

「祐人が『鬼』とやらに見えたそれは普通、個人の心に根付いている強さ、畏怖、尊敬といった感情が深く影響しているの。似た環境で生活してきたなら、似たようなものになることもあるけど、三体ともほぼ同じと言っていいほど似通ってた。だったら、ある『ひと

り』の感情に深く影響されてると考えた方が論理的よね」

「その『ひとり』が、あの男性？」

「最初は分からなかったけど、似たようなものを沢山引き連れてるのを見せられたし」

エルラガルは自嘲気味に肩をすくめた。厄介な出来事の壮大さに、祐人と筒井はそろってため息が漏れる。

それでも、筒井は質問を続ける。刑事の性質なのだろうか。

「話を聞いてると、おふたりはまるで人間じゃない何か別のモノ……」

「違う！ エルラガルはそうだとしても、俺は平凡な一般人だ。そのはずだ」

「貶されてるように聞こえるけど……あたしは、もしかしたら『人間』という括りには入らないのかもね」

「じゃあ、どういう？」

否定した祐人は置いとして、エルラガルに追求する。

「あたしは、この世界の人間じゃない。厳密に言うと、この宇宙で産まれ育ったわけじゃない、ってことらしいんだけど………だから、あたしは研究者じゃないんだから、詳しくは知らないの！ 人間が身体構造を完全に把握してないのと一緒に」

祐人は、知らないふりをして聞き流している。あーあ、と口だけが動いた。これは他人の受け売りなんだけど、と前置きして、エルラガルは続ける。

「表現の問題なんだろうけど、『世界』は複数の『宇宙』から成り立っているらしいのよ。お偉いさん達は『多元宇宙』とか言ってたわね。それで、『エーテル界』からこの地球が属する『宇宙』、『物質界』へと、あたしはやってきた、というわけ」

「ど、どこから？」

「この宇宙とは違う『宇宙』から。今いるこの『宇宙』を『物質界』、あたしたちがいた『宇宙』を『エーテル界』とエーテルに関わった関係者はそう呼んでる。そんなのただの符号でしかないのよ。」

あっちとかこっちとか、勘違いしやすいじゃない？ そのふたつの『宇宙』と『世界』は、手っ取り早く地球の様子に則って言えば、お互いに見えないけどそれぞれ大陸があって、あたしは船を漕いで大海原を渡ってやってきた。そう捉えていいみたい」

「お互いに見えないんなら、どうやって来たんですか？」

「もちろんエーテルを使って、よ。両方の宇宙には、濃度は別になればエーテルがあるの。それを同調させて、局所的に繋がる小さなトンネルを作って、それを通り抜けて来たのよ」

「でも先刻、『船を漕いで』やって来たって言いましたよね？」

「……『地球の様子に則って言えば』とも言ったはずよ」

あからさまに不愉快そうに、エルラガルは眉根を寄せた。同意するように苦笑を返して、筒井はいきなり黙り込む。エルラガルが覗き込むと、何か思案しているようだ。

帰るに帰れない祐人とエルラガルは、することがない。また机に突っ伏すエルラガルを見ながら、祐人は欠伸が出た。日付はもう確実に変わってるに違いない。

とその時、筒井がいきなり大声をあげた。

「つまり、エルラガルさんは宇宙人か異世界人かそれに類する何かで、エーテルは魔力みたいなもの、そして現在この丹羽市ではエルラガルさんの仲間が悪いことをしようとしている、というわけですね！！」

「……いくら刑事だからって、言って良いことと悪いことがあるだろう！！」

即座に祐人が反発した。

「今まで、今まで一度もそんな、『イセカなんか』だとか『マなんとか』だなんて、そんな簡単な表現をしたことが、あったか！？ 敢えて簡単な表現を避けて、言わないように言わないように、って2ヶ月もガマンしてきたんだ！ 2ヶ月だぞ、2ヶ月！！ それを、ふらっと来て分かった風に言うことがアリだと言うのか」

「祐人、そんなにガマンしてたんだ。気づかなくてごめん……なん

で怒ってるか分かんないけど」

「逆鱗に触れてしまったようで、すみません……」

エルラガルと筒井が、しんみりと謝辞を述べた。暴走していたことに気付いた祐人も、落ち着いてみせる。

「分かってくれれば、いいんだ。俺の方こそ、睡魔に襲われておかしくなってるみたいで、ごめん」

その時ちょうど、聴取室のドアが開いた。

おそろおそろ顔を出したのは、先刻とは別の女性だ。カップを載せた盆を持っている。

「皆さんお疲れだと思って。お菓子は切れてたので、コーヒーだけでも飲んでください」

「氣遣わせちゃったみたいでごめんね」

「いえ、いいんです！ 筒井さんが頑張って下されば」
と言って、女性は人数分のカップを机に置いた。

そしてすぐ退出するものかと思いきや、そこに立ち尽くしたままだ。それでは、先刻からの話を続けられない。

祐人とエルラガルは、ジト目で筒井を睨んだ。早く追い出せ。無言の圧力だ。ちなみにエルラガルは小さく舌打ちもつけている。

筒井はすっかり困った後、コーヒーに口を付けた。

「うん、いつも通りだ。ありがとう、戻っていいよ」

はい、と夜も更けたというのに元気な返事をして女性は聴取室から出ていった。

出ていくなりすぐに、今度は筒井が机に突っ伏す。

「あの子ちよっと苦手なんですよ。何考えてるか分からないとか……」

「へえ、そう」

気のない返事だ。筒井の感想にこれっぽっちも祐人は興味もないし、エルラガルに至ってはカツ井もお菓子もないとなると、全体的に嫌気がさしてくるのだ。

仕方なく、エルラガルは目の前のコーヒーに手を伸ばした。

「ぶぼっ」

「どうした、エルラガル!？」

盛大にむせた。慌てて祐人は、エルラガルの背中を撫でてやる。すると息も絶え絶えに、エルラガルは言った。

「ま、不味い……」

「それは酷ですよ」

「……エルラガルは、マスターのコーヒーしか飲んだことなかったからなあ。市販のインスタントコーヒーなんて、大概こんなもんだ……不味い」

口をつけて直ぐに、祐人はカップから距離を置いた。

不味い。インスタントコーヒーとは思えないほどだ。驚く祐人の隣で、エルラガルが面白がっている。

「なるほど、これが噂の泥水みたいだっていうコーヒーなのね」などと宣っている。

エルラガルと祐人の『不味い』発言を黙って聞いていた筒井が、躍起になって否定する。

「これを毎日飲んでるんです。それに、先刻持ってきた子にも悪いでしょう? もう言わないでください」

「「だって不味いものは不味い」」

見事にハモった。

「刑事さん、刑事さん。ショック受けてるところ悪いんだけど、そろそろ俺たち帰ってもいいかな?」

「ええ、いいですよ」

もう筒井は顔も上げない。

立ち上がった時、はっ、と祐人は大切なことに気付いた。

「エルラガル、この後どうするんだ」

「どうするって、帰るんでしょ」

「どこに」

「……ああ。良いんじゃない、祐人の家で」

「良くはないだろ」

ずっとふわふわ浮いていたエルラガルは、根無し草同然だった。というよりも居ても居なくても同じ扱いだった。つい半日程前まではそんな心配は無用だったのだが、実体が伴ってでは都合が悪い。嬉しいとか嬉しくないとかいう話ではなく、小市民たる祐人にとって近所に広まる悪い噂は命取りなのだ。

「だってあの部屋、祐人しか使ってないんだからいいじゃない。2階下の部屋なんて、4人で暮らしてるわよ」

「ブルジョアに勘違いされるような物言いを止める。そもそもだな、あの部屋は伯父さんのもので、俺は居候なんだ。立場上、住人をほいほい増やすわけにもいかないんだ」
復活した筒井が喰いついてきた。

「伯父さんと二人暮らしなんですか？ それも今現在はお在宅でない。それにエルラガルさんは帰る場所がないんですか」

「……そ、そうなるな」

「じゃあ、あたしは野宿になるの？」

「祐人くんの伯父さんはどんな仕事をなさってるんですか」

「えーっと。海外で……そう、貿易だ。買い付けで海外に出張中なんだよ」

「そうですか」

不満そうな顔をして、筒井は頷いた。

結局、筒井の援護を受けたエルラガルの押し切りという形で、祐人はエルラガルを泊めることになった。筒井に送られ帰宅する頃にはとうに2時を過ぎ、マンションにつくなり、祐人はリビングのソファに倒れ込むようにして寝てしまった。

13 すぐに破壊するような人間じゃないわよ

小鳥のさえずりが耳朵を打つ。

「んっ……」

祐人は寝返りを打った。

奇妙な違和感。いつもより明るいような気がする。まさか、思考が頭の中を駆け巡って祐人は跳ね起きた。自宅のリビングだ。

慌てて壁掛け時計を見ると、7時を指している。

「いつも通りの時間だ。習慣って本当に嫌になる……」

ふたり共、昨夜と言うのが正しいのかは分からないが、帰宅したときのままの恰好だ。制服のまま寝てしまうなんて噴飯ものだ。

ため息について周囲を見回すと、エルラガルが窓際の陽の当たるところで丸くなっていた。昨晩はソファで丸くなっていたのに、かなりの距離を移動していた。

完全にエルラガルは熟睡しているようだ。起こすのも悪いので、寝かせておく。引かかる箇所もなければ、捲れる布地もない恰好では、時間をかけるのも無駄だ。

（ショートパンツが致命的だよな）

などと余計なことを寝ぼけた頭で考えながら、祐人は携帯電話を手取る。

「……？」

時間がずれている。

部屋の壁掛け時計は7時なのに、携帯電話の時計は10時を回っていた。

「そういえば、目覚まし時計もない」

辺りを見回す。転がっているエルラガルと消失した目覚まし時計を除けば、壁の一部が光っているくらいだった。

よく見ると、違う。

夜空に輝く星々のように、壁の上に無数の点が輝いている。

「なんだこれ……」

近づいて、触れる。大小に差はあるが、小指の爪程度の欠片が壁に刺さり埋もれている。

少し離れた所に、奇妙な物体が突き刺さっていた。引き抜くと、柄の長い矢印の形をしている。

足をずらすと何かに当たった。拾い上げると、透明なプラスチックの丸い物体だった。

「矢印と丸いもの……あっ！！　ならアレが近くにあるはず」

祐人がしゃがみ込んで探すと、目的のものはすぐに見つかった。

プラスチックの丸い物体と同じくらいの紙切れ。1から12の数字が並び、細かい点が幾つも打たれている。文字盤だ。

「俺の目覚まし時計は天に召されたのか。立派な最期……いや、何故粉々になって部屋の壁に刺さっているんだ！？」

無惨にも被害者がバラバラになった現場に立ち、後ろを振り向く。まず目に入ったのは、昨夜まで被害者が居たはずのローテーブル。冬にはコタツにもなる優れものだ。

その向こうには、丸い塊。3地点はほぼ一直線上に並んでいた。

「お前が犯人か、エルラガル。一体被害者にどんな恨みがあつたというんだ」

「くう」

返ってくるのは寝息だけ。まだ寝ているのだから当然だ。

祐人は追求するのを早々に止めた。壁掛け時計を見ると、7時を指している。

「だから、時間がずれているんだよな。電池切れかな……何だこれ！！」

「ん……」

エルラガルが目を覚ましたようだ。しかし、そんなことは祐人にとってもよかった。

壁掛け時計のガラスカバーに蜘蛛の巣のようなひびが走り、その中心に見たことのある矢印が突き刺さっていた。取り外して裏面を

見ると、時計に比べて小さな機械本体部分を貫いている。つまり、小さな矢印が壁掛け時計の核をピンポイントで貫いたのだ。

「安らかにお休みください」

「んーっ。あれ、どうしたの、祐人」

手を合わせる祐人に、伸びをしながらエルラガルが訊いた。

ゆらりと祐人が振り向く。

「ほら、これ見ろ」

「何よこれ」

エルラガルの前に、犠牲者の一部を突き出した。

難しい顔をして、それをまじまじと見つめる。エルラガルは本当に記憶がないようだ。それか、知らないふりをしているのか。

どちらにしろ、祐人の方は決定的な証拠を握っている。現場にいた状況証拠と、亡き者にした手段だ。両方とも、エルラガルが犯人だと示している。

そのことを説明すると、エルラガルは、

「ごめんなさい」

と以外にもすぐに謝った。

（仕方ない、壁の傷は俺から伯父さんに謝るか）

と祐人が考えていると、エルラガルが訊いてきた。

「7時で止まってるけど、何の時間？」

「たぶん、目覚まし時計をセットした時間だ。無意識に音を止めようとして吹き飛ばしたんだ」

「そうね。記憶にないもの」

虫の知らせだろうか。なんとなく、嫌な予感が祐人の中で鎌首をもたげる。

エルラガルは続ける。

「でも、あたしだって鳴ったらすぐに破壊するような人間じゃないわよ。あ、人間ではないのかもだけど」

「分かってる。でも反射神経とかそういうのはあるだろ」

「あたしは眠りは深い方なの。寝るときは寝る、ケンカするとき

全力で。だから無理よ」

「どうだか。犯人の口から出た証言は真剣には聞けないぞ」

「そもそも、何故あたしが、無意識にしろ破壊するまで鳴り続けたのか、っていうのが謎よね」

（そういうことか……）

祐人の嫌な予感的中した。

転んでもただでは起きないエルラガルの精神は、流石というべきか。これ以上は追求できない。

「今日どうする？」

「学校行くんじゃない？あ。ああ、そうよね」

祐人は完全に遅刻だが学校に行くし、今日いちにちエルラガルがどうしているか、ということだ。

そろそろ、祐人の思考を追いかけられるようになったようだ。現状では無理にでもついて行くべきでない、とエルラガルも考えられるようになったようだ。ひとまず安心する。

「敵認定した例の人物について情報収集するのか、それとも戦闘に備えて鍛えるか。どっちがいいか、ってことね」

祐人の安心は、一瞬で脆くも崩れ去った。

真剣に悩むエルラガルの頭を、軽く小突く。

「そういうことは、ひとりでやってくれ。自分だけで動けるようになったんだから」

「でも……」

「だったら昨日の刑事に声をかけたら？ 役に立つかも」

「……うん」

エルラガルの歯切れが悪い。

いつも自分勝手に元気なエルラガルが、上の空でいるなんておかしい。とにかく、いつもの調子を取り戻して貰わなければ、と祐人はあれこれ考える。

（一番効果的な手段は、やっぱり実弾か）

などと物騒なことをかんがえながら、祐人はチェストの引き出しを

開けた。

雑多な品々の中から、白い封筒を取り出し中身を確認する。あつ、と祐人の口からうめき声が漏れた。

「ヒグチ姉さんがひとりだけ……!!」

平たい表現を使えば、タンス貯金。内藤家の現在の資産は、これだけだ。お札が一枚では、ふたりに分けられない。

「なあに、祐人？ あ、そのお金。あたしが使うわよ」

止める間もなく、内藤家の最後の資産はエルラガルに接收される。

（いいさ、いいんだ。銀行に行けばいいんだし、コンビニのATMでだって下ろせるんだ。それに、エルラガルがお金の価値を完全に把握してるとは思えない）

「5000円かぁ。ご飯食べてゲーセンに行ったら、すぐに消えてなくなっちゃうな。祐人が学校終わるまでだし、これでいいか」
完璧だった。それに加えて浪費癖もあるようだ。

心なしか、祐人にはエルラガルの小さな手に握られた5000円札の樋口一葉が泣いているように見えた。目があったような気がして、慌てて目をそらす。樋口一葉はこの街で輝くひとつの星になったのだ。そう、祐人は自分自身に言い聞かせた。

「そうだ。これ持っていけ」

メモ帳に携帯の番号を書いて、怪訝な表情のエルラガルに渡す。

「……ナンパ？」

「違う！ テレビばっかり見てるから変な言葉覚えるんだな。落ち合う時に、連絡を取るためだ」

いつでも連絡を取れるように携帯の番号を渡したが、（特に巻き込まれた周囲の人間が）心配なので、祐人はエルラガルに釘を刺しておくことにした。

被害は最小限に抑えなければなるまい。

「他人に迷惑を与えてはいけません。派手な行動は慎みなさい。お金は無駄遣いしてはいけません。困っている人がいたら助けなさい」
「何かの宗教？」

首を傾げるエルラガルに、祐人は首を振ってみせる。

「ただ、今言ったことを心に留めておいて欲しいだけだ。エルラガルのことだから、効果は期待しないけど」

そう、とエルラガルは気のない返事だ。

先刻も自分で言ったとおり、祐人は希望が叶うことを全く期待していない。エルラガルは頭が回るので、夕方には5000円きっかり消費している可能性だってあるのだから。

（せいぜい500円も残ってたら良い方か）
と考えるのが妥当なラインだろうか。

とにかく、祐人は急いで登校しなければならない。重い足取りで玄関に向かう。

「エルラガル。鍵は閉めて持つて行くから、俺が居ないと開かないからな。間違っても壊すんじゃないぞ」

「そこまで非常識じゃないわよ」

小さな拳が腰の辺りに当たった。

扉を開けると、中途半端な曇天。重苦しいことこの上ない。

振り返ると、夏空のような空色が待っていた。

「ここで一時解散だな。居なくなった奴がいるかどうか学校で訊いてみるから」

「わかった。あたしもアイツ使ってできるだけ調べしてみる」

マンションを出ると、ふたりは別方向に歩き出した。

114 把握が不十分に感じたから

祐人は焼きそばパンの袋を開ける。甘いソースの匂いが広がった。すかさず、山本が口を出す。

「炭水化物に炭水化物だぜ？ 最初に作った人って、変な趣味してるよな」

「ラーメンにライス大盛りを頼む人の言葉とは思えないよ。白いご飯、大盛りーって」

寺内は山本の方を見もせずに、弁当箱をつつきながら言う。山本はむっとした。

昼休みも半分が過ぎた。午後の授業の存在を必死に忘れようとするかのように、校舎内は騒然としている。

祐人は、甘いソースの香りを嗅ぎながら、昨日の甘い凶器をふと思いついて出していた。

「焼きそばパンが山のように積み重なってたら、しょうがないだろ。買うだろ」

「内藤は甘ちゃんだねえ」

「焼きそばパンが何故たくさん在庫かかえてるか、知ってる？」

祐人と山本が首を横に振る。すると、寺内は内緒話をするように手を口にあてた。

「実は、今年の卒業生の間で焼きそばパンブームが巻き起こったらしくて、今年初め頃までは飛ぶように売れてたんだって。その時の仕入れが捌き切れてなくて、まだ量が出てるらしいんだ」

「……寺内、相変わらずそういう情報に詳しいな」

「ピーク時は、今の3倍は出てた、って話だよ」

「お前は当時の情勢を知りすぎだ。いったい何処から仕入れてくるんだよ」

寺内は、やれやれと肩をすくめる。

「山本も内藤も帰宅部でしょ。ふたりとも興味ないんだろうね。で

も、そういった話は大概先輩の方から勝手に流れてくるものなんだよ」

「寺内だって幽霊部員だから一緒だろう」

「失礼な。週に1回は出てるし、練習試合は無欠席だよ」

「それなのに強いらしいじゃないか。他の部員には失礼だ」

「たまたまだよ」

そう言って、寺内は頬に薄く笑いを浮かべた。

そういえば、と寺内は天井を見上げる。祐人と山本は、寺内の毒気に置いてきぼりとなった格好だ。

「内藤は二日連続で社長出勤だったよね。そのうえ、昼以降もいなくなっただし。何かあったの？」

「寝坊だろ、男には叶えなくばならない夢があるんだよ。特に痛ッ」

「ごめん、山本。足が勝手に……」

「ちよつと私用で……」

「私用以外なら公欠になるんだよ、内藤。俺たちの仲じゃないか、秘密はナシだぞ」

山本の目が面白いものを見つけた、と喜んでいる。寺内も話題を提供した立場で、止めるつもりはないようだ。

適当なウソも思い付かないので、祐人は事実を気楽な風に言うことにした。

「ケンカ売られてね。どうにか早く決着させようと思ったんだけど、相手も粘り強くて」

「じゃあ、今日のはお礼参りってやつか!？」

「テンション上がりすぎだよ、山本。相手はやっぱり、金久保?」

「いや、金久保なんだけど生徒じゃなくて退学者らしい」

「なあに!!? だったら放課後、こっちもお礼痛ッ」

勢い良く立ち上がった山本は、寺内に足を踏まれて椅子に倒れ込んだ。それでもめげない山本に、寺内の左ストレートが華麗に決まる。放物線を描いて崩れ落ちる山本を、祐人は呆然と見ていた。

「内藤、どうする? 山本は頭冷やすためにこうしたけど、お礼参

りするのはやぶさかじゃないよ」

「ああ、いい。いいよ。そんな大事じゃないから。お礼参りされたわけじゃないし。体力限界で睡眠取りすぎなくらい寝てただけだ」

手と首を必要以上に振って、祐人は否定する。

山本と寺内は氣遣わしげな顔だ。だが、ふたりが食いついてくるとは祐人には意外だった。

（ふたりとも中学の頃、かなり荒れてたんじゃないか？ それに、きっと寺内の方が強い……）

と祐人は考えるのも無理はなかった。

その寺内は、やおら携帯電話を取り出した。覗き込もうとする山本の顔を見ずに殴る。

「誰にメールしてるんだ」

目ざとい奴、と寺内は呟いた。ただ殴られたのではなく、山本もきちんと確認していたようだ。

「中学の時の知り合いにね。そのころのパイプはまだ生きてるはず。とりあえず情報集めるだけでも、と思って」

「そういうことなら、俺も俺も」

山本も携帯電話を取り出す。ふたりとも、本格的に関係者だったようだ。

クラスメートの新たな一面を知って喜ぶべきなのか、黒い過去を知らなければよかったと後悔すべきなのか、祐人には見当がつかなかった。焼きそばパンをかじりながら、祐人は話題を振る。

「お前ら、中学の頃はそういう方面だったんだ？」

「まあね。中三の秋には早々に抜けたけど」

「若さ故の過ちってやつ？ 大人社会への闘争、みたいな」

寺内と山本は、顔も上げずに親指を走らせる。校内での携帯電話の使用は、原則禁止になっているのだが気にも止めないようだ。

メールを送信した寺内は、すぐに携帯電話を制服のポケットに入れる。

「とりあえず、連絡してはみたけど情報が得られるかどうかは微妙

だね」

「頼んだわけではないから、俺は別に構わないけど」

口ではそう言うが、祐人はある考えが閃いていた。

ここでこうしていれば、例の失踪者たちについて何か分かるかもしれない。なにしろ、昨日ケンカした相手だ。エルラガルと筒井が当たってるだろうが、こういった横のつながりが役に立つかもしれないのだから。

「山本お、何してるんだ」

突然後ろから、山本は肩を掴まれた。ぞっとして、山本は指一本動かせない。

あーあ、と寺内は呆れ顔だ。最近見た記憶があることに、祐人は気づいた。

山本の肩をわしづかみにして仁王立ちするのは、まるで鬼のような巨体だ。

「校内で携帯電話の使用は禁止。そうだな？」

「ちょ、先生。待って、待ってください」

「携帯は没収。指導室まで行こうな」

「先生、先生！ 寺内も先刻、携帯使ってました！ あいつも同罪です」

「見てない」

「せ、殺生な！！」

山本は襟首を掴まれ、引きずられる。恨みつらみを込めた視線を残して、教室から出て行った。

十秒程してから、寺内は何事もなかったかのようにペットボトルに手を伸ばす。

祐人は焼きそばパンの残りを口に放り込んだ。

（そういえば、エルラガルどうしてるかなあ）

「へくしっ」

「カゼですか？ 止めてくださいよ、新車なんですから」

「知らないわよ」

エルラガルは鼻をすする。

筒井の運転する車は、丹羽市の市街地を走り抜けている。

「誰かがあたしの噂してるのかしら」

「やっぱりエーテル界とかでも、くしゃみすると噂話されてるって言うんですか？」

「言わないわよ。テレビで見たから」

「そ、そうですか」

エルラガルにとって、テレビは絶対の情報源だ。干渉不可の身では、無秩序に情報が垂れ流され続けるテレビは本当に都合が良かった。

対向車の切れ目を抜けて、車は右折して国道に入る。

「最初に行くのが、図書館で本当に良かったんですか？」

「いいのよ。先刻見せられた地図だけでは、この街の把握が不十分に感じたから」

「すみません」

筒井が助手席に目をやると、エルラガルが白地図を眺めていた。

「『いとこ』はちょっと無理がありましたかね」

エルラガルが警察署に現れた時、筒井は「いとこが来た」と言い張って職務を抜けてきたのだ。上司は何も言わなかったが、同僚たちからの無言の圧力を振り切ってきたことは、少しばかり筒井は心配だった。

だが、そんな筒井の思いもすぐに消し飛ぶ事態が発生した。

呼び出されて出向いてみると、エルラガルは庶務課の女子のおもちゃになっていたのだ。お菓子で餌づけされている間に、青い髪の毛は弄られ、頬はつつかれ、もみくちゃだった。その真ん中で、エルラガルは平然と為されるままにしながら用意された丹羽市街地図を眺めていた。

それを引っ張り出すのに数十分、事情を説明するのにまた数十分かかったのだった。

「年齢的に『姪っ子』と言った方が話が通りやすかったかもしれないね」

「なんて戯れ言を。あたしの正確な年齢を聞いたら、あなた驚くわよ」

「えっ！？ 本当はいくつなんですか」

「言わない」

エルラガルは即答する。無然とした表情でそっぽを向いた。

しまった、と筒井が後悔したのもつかの間、エルラガルは何か思いついたようだ。祐人がこの場にいたら、間違いなく距離をとることを進めただろう。そんな表情だ。

「ねえ」

「はいいい！？」

思わず、筒井は声がうわずってハンドルを回してしまう。なんとか蛇行する車の体勢を立て直すが、エルラガルはどこ吹く風だ。

「もし、あたしが突然ここから消えたら驚く？」

「それは勿論。走ってる車からどうやって消えるんですか」

「簡単よ。実体化を解けばいいいん……」

「！！！？」

ぱつとエルラガルの姿が車内からかき消えた。

後続車からのクラクションが断続的に鳴る。

「……はっ！！ あぶ、危ない！ 事故が！？」

また蛇行していた車を、慌てふためきながら路肩に停車させる。辛うじて、事故は防げた形だ。

通り過ぎる時に、後続車にばんばんクラクションを鳴らされていく。筒井は警察関係者として、平常心ではいられない精神状態だ。

一段落して、筒井は助手席の方を見た。

エルラガルの姿はそこにはない。シートに触ると、まだ温かい。確実にそこにいた証拠だ。

「あれ、エルラガルさん？ 本当にいない？」

後部座席や足元、果てはダッシュボードの中まで確認するが、エル

ラガルの姿を見つけれない。

その時、筒井の心の中に恐ろしい記憶が立ち上がった。エルラガルが突然消え、後続車からクラクションを鳴らされた時。慌てて見たバックミラーに、「何か青いもの」が映り込んでいなかっただろうか。

（まさか、アレが？ でも、どうやって？ まさか車にひかれて…）

嫌な想像ばかりが頭を占め、汗が頬をつたう。

「とにかく、確認しなければ！」

思考がそこまで辿り着くのに数分かった。

まずは車を降りようと筒井がシートベルトに手をかけた時、
「!!？」

不意な物音に反応して、筒井は飛び跳ねた。

慌てて音のした方を見ると、

「やっ。開けて」

「ええええええええええ!!？」

気軽な声で、エルラガルが車内を覗き込んでいた。先刻の物音は、エルラガルが助手席側の窓を叩いた音だったのだ。

驚きながら、筒井は助手席側のドアのロックを外す。エルラガルは、さも何もなかったかのような表情で、するりと車に乗り込んだ。

「どう、驚いた？」

「え、いや、ちょっと。ど、どうやって」

あまりにも驚きすぎて、しどろもどろで要領を得ない。

難しい数学の解法でも尋ねられたように、自慢げにエルラガルは胸を反らした。

「実体化を解いて、車内から離脱したのよ。それで歩道に着いてから実体化して、ここまで歩いてきたわけ」

「はぁ」

「蛇行運転には注意しなさいよね」

今ひとつ、筒井には合点がいかない。

エルラガルの会話の文脈を、行間まですみずみと読み解くところなる。

筒井の運転する車が時速60キロで国道を走行中、エルラガルはその車内から実体化を解除して離脱。車外域に出るとすぐさま実体化し、足だけで踏ん張ってブレーキ。だが後続車がすぐのところまで迫っており、衝突を防ぐため再び実体化を解除した。この瞬間を筒井は、バックミラーを通して見たのだ。その後エルラガルは歩道まで来ると、実体化して筒井の車が停車した位置まで歩いてきた、というわけだ。

「どう？ 昨日は『嘘だ』って言ってたエーテルとかそういう話を信じる気になった？」

エルラガルは居丈高に言い放つ。筒井はハンドルに寄りかかって、心底ショックを受けて呆然としていた。

いつまで経っても、筒井は微動だにしない。不審に思ったエルラガルは、筒井の顔を覗き見た。

「ウソだウソだマジックだウソだウソだウソだマジックだウソだ……」

「ふふっ」

エルラガルの口の端から笑い声が漏れる。目をつぶり、自身に『常識』を言い聞かせる筒井の様子が笑いを誘った。

くっくくくつ、と笑いを堪えていると、筒井が顔を上げた。真面目な目をして、エルラガルを見る。

「先刻のは、マジックですよね？ タネも仕掛けもあるんですよ」

「信じられないわよね。受け入れるのは難しい。『普通』の反応をしてくれる人がいて、あたしは嬉しい」

筒井の手を取り、真剣な目でエルラガルは言い聞かせた。筒井の安息になるのではなく、彼の発言を否定し再度主張するものだ。

だから、

（たとえ絶望に転んでも、壊れても、裏切られたとしても、あたしはそれを尊重する。だってこれは、今まで生きてきた自分の『常識』

を、人生を真っ向から否定することになるんだから）とエルラガルは思う。

そして、

（こいつと違って、祐人は疑いもせずを受け入れて、でも『信じない』。アンバランスというか、辻褃が合わないというか……でも、良い意味であたしの『常識』を覆してくれたことになるのかしらね）

と、ここにいない祐人に思いを馳せた。

現実に目を戻すと、筒井が迷子の子供のような顔でエルラガルにすがっていた。「こ、これから、何をどうすれば……」

「ええい、自分の常識がちょっと揺らいだくらいで！　まずは車を出して。最初は図書館に行くのよ」

ブンブンとエルラガルは腕を振り回す。

無言で、死んだ魚のような目をして筒井は車を発進させた。

¶15 逆さまにしないでいいのね

「部活に行こうかな」

「え、寺内。部活行くのか」

バッグを担いだ寺内に、祐人は声をかけた。

本日の授業は全て終わり、放課後。クラスからひとり、またひとりと、それぞれの用事で去っていた。校内からは喧騒が薄れ、グラウンドや体育館からは運動部のかけ声が細々と聞こえてくる。

「ダメかい？」

「いや、ダメじゃないけど」

ダメだ。祐人からすれば、身勝手ながらダメだ。昼間に寺内と山本が送っていたメールだが、未だ有用な情報が入って来ていない。

所詮、そう簡単に情報が手に入るものではない、と諦めるのは簡単なのだが、そのまま引けないのが祐人の心情だ。

（エルラガルに合わせる顔がないよな）

とにかく、今は情報源に一番近い寺内にすぎるしかない。かといって、先刻は一度興味の無いふりをしたので、何か分かったら教えてくれ、と頼むのは釈然としない。

ここは、なるべく長い時間、寺内を足止めするしかない。祐人は決心する。

「山本が戻ってくるまで待つてなよ」

「それはいいけど、あいつは一体どこに行ったんだろうね」

寺内がカバンを置いた。祐人は内心でガッツポーズする。

山本はホームルームが終わるとすぐに、教室から飛び出していった。いつもだらだらと居残る山本にしては珍しい事態だが、祐人はなんとなく想像がついていた。

「ケータイ取り戻しに行ったんじゃないかな」

「内藤もそう思う？ それなら、下校時刻までお勤めになるか。生徒指導に捕まるのが、奴の運の尽きだよ」

「それも2日連続。逆にあのふたり、物凄く気が合うんじゃないか」

「ただ弛んでるだけだって。いつも、あっちにフラフラ、こっちにフラフラ、って落ち着きないし。あの話が本当なら、同情するべきなんだろうね」

「例の……?」

「内藤クンと寺内クン!? まだいたの」

振り向かずとも祐人には分かった。このあっけらかんとした声は、古関のものだ。

振り向いたらやはり、戸口に立っていたのは古関だった。

「まだ、とはご挨拶だなあ、古関さん」

「山本の行方を考えてただけで、居残りたくて居残ってたわけじゃないし」

「山本クン探してるの? 先刻職員室にいたのを見かけたよ。ケ

ータイの話だと思うけど」

やっぱりか、と祐人と寺内は顔を見合わせる。

ふたりの予想通り、山本は2日連続で連行された生徒指導の先生のところへ行っていた。

説教がとにかく長いことが有名で、放課後捕まると下校時刻をゆうに超えると噂されている。もちろん最終的には解放されるし、接収物も返却される。

つまり、その危険を冒してまで、山本はケータイ回収に向かったことになる。

「いったい何が、山本にそんなことをさせたのか……」

「女の子からの電話とかじゃないの? 彼女候補の子、かなりの人数いるらしいよ。自称だけど」

「内藤クン、それ、刑事ドラマみたい! やってみよ。山本クンは、誰を狙っているのか……」

「誰が第一候補なのか、古関さんは気になるんだ?」

「えっ!? 人並みには、ね。内藤クンも気になるよね!!」

「ひ、人並みには、ねえ」

慌てる古関に急かされるようにして、祐人はオウム返しする。別にこれといって興味はないのだが。

突然、寺内がポケットに手を入れた。携帯電話を取り出すと、お、と声を上げた。

「やっとマトモな情報が入ってきた。例の連中は、ここ一週間ほど見かけてない……改めて居そうな所を回ってみただけで見つからなかった……」

寺内はメールの文面を流し読みした。

それまでのメールは、名前も知らない、金久保高中退で、特徴的な格好の三人組が誰であるかの確認が大半だった。だから、能動的と言っている情報はこれが初めてだ。ちなみに寺内に事ある毎に確認されて、祐人は大半のことを白状してしまっていた。

怪訝な顔で、古関が訊いてきた。

「何があったの？」

「……男同士の話だ」

「内藤のケンカ相手に『お見舞い』しに行こうかなあと」

『お見舞い』に力を入れて、真剣に言った祐人を、寺内はさらりと受け流す。

意味を理解した祐人は表情を強張らせ、額面通りに受け取った古関は険しい顔になった。

「内藤くんが、ケンカ？」

「俺が望んでそうなった訳ではなくて、成り行きでそうなってしまっただけなんだよ」

「どうだか。挑発したんじゃないの」

「ちよっ、寺内!？」

混ぜっ返す寺内に、祐人はつかみかかろうとするが、すげなく避けられる。

振り返ってみれば、寺内の発言をまるっきり信じたようで、古関は驚いたような顔だった。祐人はもう、何と声をかけたら良いか分

からない。

「あ、の。古関……さん？」

「ケンカ……内藤くんは、暴力に訴えるようなキャラじゃない、と思っただけだなあ。私の勝手な思い込みか」

「訴えたとかそういう訳じゃなくて……そう、正当防衛だ」

「自分のやったこと、そうやって正当化しちゃうんだ」

「……」

ますます泥沼化の様相を呈してきた。古関の表情はどんどん暗くなり、祐人がもがけばもがくほど、状況は明らかに悪くなっている。

祐人は助けを求めて寺内に視線を送るが、楽しげにメール画面に見入っていた。

「それじゃ、わたしは帰るね……」

そう言って、古関は力なく笑った。かける言葉が見つからない。祐人は手を挙げることにできない。

バタバタと慌てたような足音が、祐人の耳に余韻として響いた。

「……？」

足音が、どんどん近づいてくる。廊下からだ。

突然、サッカーボールのように人間が、教室の中に飛び込んできた。

「山本!？」

膝に手をついて肩で息をしているのは、携帯電話の返却に向かっていたはずの山本だった。

息も絶え絶えに、山本は祐人に歩み寄り、回収してきた携帯電話を見せる。

「山本、ケータイがどうした？」

「いいから、これ……見てくれ。使える情報だろ……？」

山本は、2時間ほど前に受信していたメールを祐人の目の前に突きつける。

祐人は軽く受け取ると、寺内と頭を寄せ合って画面に目を走らせる。

「その3人、磯村たちだ。1週間前に駅前で会ったぞ」

「もう、山本クンまで……私はもう帰るからね。廊下は走っちゃダメだよ」

自分たちだけの世界に没頭する男子たちに心底あきれ果て、古関は珍しくため息まじりだ。

重苦しい動きで、古関は机に置いたカバンに手をかけた。

「山本……まだここにいたのか」

はっとして声のした方を見ると、教室の出入り口を塞ぐように太い丸太を立てたような大男が立っていた。

山本が、慌てたようにのけぞる。ピリピリとしたプレッシャーは、無関係の祐人たちまでも刺激する。

「『生徒指導の大熊』じゃないか……山本。お前、ちゃんと手続きしてから、ケータイ回収したんじゃないのか」

「実は、説教があまりにも長かったから、ごまかして来たんだ。

見立てが甘かったか」

「どうやって？」

祐人と寺内は、じりじりと後退しながら山本に訊いた。

生睡をゆつくりと飲み込んでから、山本は口を開く。

「……実は」

「娘はまだ3歳半だ！ 変な男と歩いてたはずがない」

「どういうことだ？」

脈絡がない。ただ、目が血走っているのは明らかだ。祐人と寺内は首を傾げた。

山本を含む誰も逃がさないように、『大熊』は両手を大きく横に広げる。その距離を一定に保ちながら、山本は肩をすくめる。

「説教の途中に、娘さんの写真を初めて見たふりして、『あ、お嬢さんですか？ 可愛いですね。この前、男と一緒に歩いてるのを見かけましたよ』って」

「引っかかる方にも問題が……あ、いやいや、先生は全然悪くなんてありませんよ。悪いのは全部、山本ですから」

顔色が変わったのを敏感に察知して、寺内は山本を前に押し出す。

慌てて、寺内は救いを求める眼差しを祐人に送った。だが、祐人も捕まるのは嫌だ。山本の肩を掴んで、前に押し出した。

「そのまま、逃がすんじゃないぞ」

「な、内藤まで！？　がっかりだよ、お前らには！！　裏切り者、卑怯者、はくじょーものー！！」

暴れまわる山本を、いとも簡単に羽交い締めにしてねじ伏せる。その手際の良さに祐人たちは舌を巻いた。と同時に、反発したらどうなっていたかを考えると、冷や汗が流れた。

よっ、と軽いかけ声で山本は肩に担がれ、頭より高い位置に収まる。顔が青白く見えるのは、祐人の気のせいだろうか。

「誰か、誰か助けてくれえ！　何でもするから！」

今にもくびり殺される鶏のような叫び声をあげて、山本は再び教室から消えた。

遺された三人には、安堵の空気が広がる。ぬるま湯のような空気から最初に抜け出したのは、古関だった。

「……もう帰るね」

鞆を肩にかけ直して、古関は疲れきった表情で一步、踏み出した。

その足に、何かが当たった。床を数メートル滑って、その先でくるくる回転して止まる。拾い上げると、携帯電話だ。

「このケータイって、山本クンのかな？」

古関は、祐人と寺内の方を振り向いた。ふたりはカラクリ人形のごとく、首を縦に振る。

突然、ブブブ、と古関の手の中で携帯電話が鳴った。

「申し訳！！」

古関は妙な言葉を叫んで両手を合わせる。そして間髪入れずに液晶画面を見た。

『新着メール　1件』と、無機質な文字列が並ぶ。

「見たい！　でも私にそこまでの自信がない」

「自信の問題なのか！？」

「山本のケータイが何故ここにあるのか、ってことと『申し訳』って何だよ、意味分かんないってことをまず明らかに………聞いてないよね」

盛り上がる古関と祐人から距離を置いて、寺内は肩をすくめた。

再びの振動。

驚いた古関は、携帯電話を取り落としそうになる。画面を見れば、新着メールの件数が1件増えていた。

「山本くんは人気がありますなあ」

「カネ貸せ。みたいなメールなら、ありえそうだな」

「あはは、内藤くん、ひどーい」

「誰からのメール？」

「え？ 誰からかな。私には見れないよ、ってまた来た」

短時間のうちに、山本の携帯電話は計7通のメールを受信していた。本人の不在にもかかわらず、だ。

不気味にすら思えてきて、祐人ら三人は顔を見合わせる。

「誰が見る？」

「山本クンのだよ？ 勝手に見ちゃダメでしょ」

「古関さんだって気になってるでしょ」

「まあ、それなりに……」

「じゃあ、ここは俺が」

「内藤！？」

古関の手から携帯電話を受け取ると、祐人はすぐさま受信メールを確認する。

1 通目。

「ケンカか？ 俺も混ぜろよ」

山本が言ってた連中、竹内と吉見と磯村。 確実」

2 通目。

「そいつら、きっと金久保の磯村、竹内、吉見だ
あんまりいい噂は聞かないケド、バカじゃない
丹羽駅から北の方には行かないハズだ」

3 通目。

「金久保の竹内たちだな

国道沿いの大きなゲーセンとかでよく見かける」

4 通目。

「気になってる女の子とはどこまでい……」

「こいつは必要ないな」

「えっ、飛ばすの！？ 今のバックバック！」

「古関……」

祐人の手の中の、山本の携帯電話を、古関も覗いていた。むしろ、祐人よりも真剣に。

早く早く、と古関は手だけで急かす。

祐人はひとつため息を吐いて、古関に山本の携帯電話を渡した。他人の恋路に興味はない。どこまで流れて行くのか分からない山本の場合は、特にだ。

「俺は帰るわ」

「いいのか？ 全部見たわけじゃないんだろ」

「今更ながら、山本に申し訳ない気がしてさ」

古関の手が止まるのを目の端で捉えながら、祐人は言った。

それを見て、寺内は頷く。

「責任を持って、後で山本に返しておくよ」

「サンキュ」

「部活に行けないんだ、代わりに中身をじっくり精査させてもらうけどね」

「おお、恐っ」

寺内とひとしきり笑いあって、祐人は教室を出た。

山本の携帯電話に送信されていたメールからは、祐人はそれなりの情報を手に入れた。

全てのメールに目を通しておきたいところだったが、3 通目までで次に繋がる情報は十分だ。実際、4 通目を見た瞬間に、祐人の中に、山本に申し訳ない気持ちが湧き上がってきたのだった。

階段を駆け降りると、直ぐに昇降口ホールになっている。

靴を履き替えていると、ポケットの携帯電話が鳴った。知らない番号だが、祐人にはなんとなく想像がついた。

「……もしもし」

『！！？　おー、聞こえた聞こえた』

予想通り。どことなくふざけたような声は、エルラガルのものだ。

すると突然、携帯電話から耳を離してもいないのに、エルラガルの声が遠くくぐもったようになった。

『え……？　あ、そうなの？　逆さまにしないでいいのね』

「どういことだよ」

『筒井のケータイ借りたんだけど、耳の方と口の方をひっくり返して……』

祐人には、大体分かった。エルラガルは一昔前の、初めて携帯電話を使う高齢者のようなマネをしていたのだ。

かすかに聞こえる筒井の忍び笑いが、祐人の考えを肯定している。

『そんなことはどうでもいいの！！』

エルラガルは、声を張り上げた。

『祐人の学校の正門前で待ってるから、早く来なさい。今日だけで分かったこと、いっぱいあったんだから』

「そりゃあ、良かった。別行動にして正解だったな。こっちも、少しは情報手に入ったから」

『何ですって！？　なら来なさい、早く来なさい、今すぐここに！！』

「分かった分かった」

言って祐人は、通話を切った。エルラガルの大声で、鼓膜が悲鳴を上げている。

116 コイツに全部押し付けられ

「と、いうわけなんだけど。 どうかかな？」

「うう、うーむ」

エルラガルは唸り込んでしまった。

祐人が今日1日、学校にいた間にたまたま得られた情報を一通り、かいつまんで話し終えた後だ。

エルラガルは難しい顔をして、膝を抱えている。行儀が悪い、と祐人がつついても、一向に直しはしない。それはつまり車内だからということであって、筒井の運転する車の後部座席に、祐人とエルラガルは座っているのだった。エルラガルと共に行動していた筒井は、連続失踪の新情報欲しさに運転手を買って出ていた。

「例の3人の名前、『磯村武彦』、『竹内豪』、『吉見浩二』は勿論、確認してましたが、出没情報は有益ですね。 私ひとりでは限界がありますし」

「失踪は事件にならないんですか」

祐人の問いかけに、筒井は肩をすくめた。

「元々、同僚達はたまたま家出が重なっただけだと思ってますし。

それにエルラガルさんの話が本当だとしても、誰も信じないですよ」

「それもそうか」

祐人は、筒井の言い様に妙に納得してしまう。ただそうすると、疑問がひとつ。

「なら、どうして刑事さんはエルラガルの話を信じるんですか？」

「信じた方が、楽しいでしょ。 やっぱり」

即答だった。エルラガルとは方向性は違えど、筒井も気ままに生きるタイプのようだ。

悶々と悩み続ける祐人とは、いずれも対極の存在だ。

エルラガルが顔を上げた。

「……地図」

「モツツアレア？ カマンベール？ いや、なんでもないです」

「地図、取って」

筒井は助手席にあった紙切れを、後部座席に投げてよこす。エルラガルはそれを拾い上げると、縦にくるくる回し始めた。

「あれ、ここどこ？ どっちがどっち？」

混乱するエルラガルの脇から、祐人は地図を覗き込む。

クリーム色の下地に、茶色の線が縦横無尽に引かれている。そして、線の交点や端にはデフォルメされた建物や岩が描かれている。

祐人はゆっくりと、エルラガルの肩に手を乗せた。

「そんな観光マップで何が解るんだ？」

「ん？ これしかないんでしょ。今日は御者も、これだけ見てたみたいだし」

「御者じゃなくて、運転手だな」

「運転手じゃなくて、『筒井』って名前があるんですが」

祐人はひとつ、せき払いをする。

仕切り直しだ。追求の手を止めるつもりはない。

「今日は、何してたのかな」

「この街を見て廻ってた。何か不自然なところはないか、って」

「その観光客用の地図で？」

「ええ、もち……ろん」

エルラガルが顔を上げて、祐人の方を見た。

「じゃあ、もう一回訊くぞ。今日は、何してた？」

「……祐人と別れてすぐ、警察署に行ってお菓子食べて、城跡に行つて、和菓子食べて、山に行つて有名な美しい滝を見て、洋菓子食べた」

まるで暗記した円周率を唱えるかのように指折り数えながら、エルラガルはすらすらと淀みなく供述した。

そして、首を傾げて祐人を見上げる。

（自分に非がある可能性なんて、これっぽっちも考えてないんだろ

うな……」

「あ、そうだ！」

エルラガルが、今まさに何か思い出したようだ。

ポケットに手を入れるやいなや、何かを引っ張り出す。

「これ、結局使わなかったから、返す」

祐人が出した手に、エルラガルはくしゃくしゃになった紙切れを落とした。広げると、樋口一葉の顔が描かれている。今朝エルラガルに搾取された5000円札だ。

エルラガルは、あごをしゃくって筒井を指し示す。

「全部おごってもらったから、使わなかったの」

「全部！？ 刑事さん、エルラガルがご馳走になったようで」

「いえ。 例のお話をたくさん聞かせていただいたので」

勿論、運転に一切の支障を来すことなく、筒井は返答した。

祐人の見た感じでは、筒井はエルラガルの話を半信半疑だろうが、全て聞いたようだった。その上で、全て理解して信じられているのかは、分からない。

（かくいう俺自身も理解はしたつもりだが、まだ受け入れられないし、手放して信じることもなんか出来ない。 昨日今日で全部どうする、なんて選択は無理だろうさ。 そんなことより、拉致られたヒグチ姉さんが無事に戻ってきて良かった）

祐人はくしゃくしゃのお札をたたんでポケットにしまう。

その隣でエルラガルは、運転席の方に乗り出した。

「ねえ、次はどこ行くの」

「ここで話を聞いた限りでは、丹羽駅の南の方を回ってみるのがいいですよ」

「南？」

エルラガルは、祐人の方に振り向く。ひとつため息をつくとき、祐人はカバンからボールペンを取り出して、エルラガルの地図に市内の外観図を書き込んでいく。

各スポットの距離感やお互いの方角は粗いのだが、主要道路等は

あらかた記載されているので、記憶をたどりながら埋めるのにそれほど時間はかからない。数分と経たずに、観光マップに住民の意識が反映された地図が完成した。

「よし出来た。エルラガル、これ見て。この太い線が、今走ってる道路な。で、地図の下側、南の方に行くと、だいたいこの辺がゲーセンやらカラオケやらが集まってるところ」

地図の中央右側の丹羽駅から見て、南東寄りの場所を祐人は指し示した。

エルラガルはそれをまじまじと見つめる。

「ゲーセン……祐人!!」

「ダメだ! 言うと思った」

出したエルラガルの手のひらを、祐人はすぐさま叩き落とした。筒井が笑いをこらえながら、エルラガルに言う。

「ダメですよ、エルラガルさん。遊びに行くんじゃないんですから」

「むう」

「それよりも、あの三人がよくいた場所のようだから、あの怪しい人物とかち合うかも」

祐人が何気なく発した言葉に、エルラガルがぴくっと反応した。

一瞬で、まとう空気が怠惰から緊張に塗り替わる。

（そうだ、この感じ……）

神経のざわめきが首筋を刺激する、その感覚に祐人は覚えがあった。エルラガルが実体化した時だ。隠れて祐人を狙っていて、ひとりになった瞬間に襲われた。

無意識に、首を護るように手が伸びている。

（これは、エルラガルが緊張してる、ってことなのか）

普段接している時には感じえない感覚を、祐人は全身にひしひしと感じていた。

そんなものには気づいてないのだろう、筒井が一番近いゲームセンターの駐車場に乗り入れる。

「ひとまず、ここに止めますね」

「いよし、ハイスコア取りにいくぞ」

肩をぐるぐる回して、エルラガルは車から跳ね降りた。

その手に、祐人は有り得ないものを見た。驚いて、エルラガルの後を追う。

「ちょっと待て、エルラガル！」

素早いもので、エルラガルは既に出入口の自動ドアの前にいた。

祐人の声を聞いたエルラガルは、前後を見比べて一瞬、躊躇したような素振りをみせる。だがすぐに、イタズラが見つかった子供のような苦笑いで祐人に手の中のものを見せた。

「やっぱり、気づかれたか」

「いったい、いつどうやってこんなことを？」

「祐人が気を抜いたところを見計らって、ちょちょいとね」

エルラガルの手にあったのは、紙切れ一枚。

だが、今日1日だけで祐人とエルラガルとの間を何回往復したかわからない代物だ。そして、現在の全財産でもある。

「もう止めるよ、こういうイタズラ」

「はい」

エルラガルは返事したが、守られるかどうか、祐人には見当もつかない。ひとえにエルラガルの心持ち次第だ。

祐人がため息をひとつ吐くうちに、筒井がふたりの所まで追いついてきた。

「いきなり走ってどうしたんです？」

「なんでもない」

ムスツとして、エルラガルはそっぽを向く。その視線はゲームセンタ―の中に、注がれ続けている。いかにも楽しげでどこか空虚な、電子音が微かに祐人たちの耳に届く。

筒井が、エルラガルの肩を叩いた。

「入ってみます？　ゲーセン」

「いいの！？」

「勿論いいですよ、情報収集なんですから」
「はあ、とエルラガルの表情が明るくなる。」

「じゃあ、行こうへやっ!？」

自動ドアが開いた瞬間、エルラガルは逆方向に飛び跳ねた。祐人と筒井をも巻き込んで、固いアスファルトに強かに打ち付けられる。

だが、身軽な動きでエルラガルは跳ね起きると、巻き込んだ祐人と筒井を無視してゲームセンターの出入り口から大きく距離をとった。

「痛え……なんだよ、突然」

「エルラガルさん!？ 危ないですよ」

祐人と筒井はゆっくりと立ち上がって、振り向く。

その先ではエルラガルが、顔を半分だけ、隠れた車の陰から出してこちらの様子を伺っていた。ふたりが近づいても、ただただ震えるばかりだ。

「いったいどうしたんだよ」

「ええい、何してるの! 早くこっちに隠れて」

言うが早いか、エルラガルの右手が青い光を纏う。

祐人には一瞬、それが何を示すのか分からなかったが、エルラガルの様子から推して、

(……ヤバイ)

ことは判る。祐人はとっさにエルラガルの手を取った。

「落ち着け。 どうしたんだよ」

「あの建物の中、錯乱と幻惑の術式が張り巡らせてあるかもしれない」

「よく分からないが、罠が仕掛けられてるかも、ってことか？」
エルラガルは軽く頷いた。その眼が、らんらんと煌めく。

それを受けて、祐人はようやくエルラガルの意図を理解できた。戦闘の予兆を感じ取って、情報共有のために距離をとったことになる。つまり震えていたのは武者震いで、それは直ぐにも敵とぶつかるつもりだということだ。

しかし、一般論として祐人は訊かなければならないことがある。

「人目につくところでは後々厄介なことになるんじゃない……」

「何言ってるの？ こっちにはこいつがいるでしょ」

そう言って、エルラガルは人指し指で筒井を示した。

駐車してある車の陰に隠れた少年少女と、その後ろで監視するように立つ男性。

改めて振り返ってみると、見た目と実態はほぼ逆だ。完全に主導権を握っているのはエルラガルで、筒井は完全に振り回される立場だ。

「政府の人間がいるんだから、あたしたちが正義。もし問題になっても、コイツに全部押し付ければそれで万事解決」

「……どんな論理だ」

「あの、全部聞こえてるんですけど」

慌てて主張する筒井に、エルラガルは、わざとらしく肩をすくめた。

「大丈夫だって。あれ一軒だけで、他の建物には影響しないようにする、か……」

不意に、エルラガルの口が止まる。不穏な発言に身を固くしていた祐人と筒井は当然、不審に思った。その意味するところを考え、忙しなく周囲に気を配る。

敵襲だ。

祐人と筒井は、ほぼ同時にその結論に辿り着いたのだった。

だから、

「違う、そっちじゃない」

そのエルラガルの声に導かれるように彼女の方を見た時、ふたりは困惑した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2731k/>

アズライト

2011年11月5日19時07分発行